キリスト教主義大学においてキリスト教を教えるということ
―キリスト教とヒューマニズムの協働―

三上　　章＊

A Study of Teaching Christianity in a Christian University
― From the Viewpoint of the Cooperation between Christianity and Humanism ―

MIKAMI Akira

The purpose of this article is, first, to show my basic idea of Christiantiy and how I applied it in teaching Introduction to Christianity which is a mandatory subject for first-year students at Toyo Eiwa University and, second, to examine its adequateness of my efforts.

My basic idea of Christianity is that, among many other elements of Christianity, being a Christian is by far the most important one, because without the existence of Christians such other elements as Church buildings, Bibles, hymns and clerical institutions will become meaningless. If anyone claims that he or she is a Christian, it is necessary to examine what kind of Christian he or she is. Therefore the definition of being a Christian becomes very important. My definition of being a Christian is being a good person to the extent that one partakes of something of divine goodness and continually endeavours to foster it so that it is always growing towards the supreme goodness who is God Himself. In other words a Christian is a good person in the way that he or she courageously faces the problems in the society and take actions according to his or her own conscience.

The following topics are dealt with in order to examine how my idea of being a Christian may be applied to and how much adequate it is.

1 Christian religion as one of the world religions.
2 Manifold images of Jesus in the human history and the present time.
3 A Christian as a good person in the meaning of one who partakes of divine goodness.
4 The constraint of desires: how are needless desires constrained?
5 The causes of wars: why do wars happen? why don't they vanish?
6 The analysis of violence: why do men resort to violence?

キーワード：キリスト教、善き者、ヒューマニズム、プラトン、ケンブリッジ・プラトニスト
Keywords ：Christianity, good person, humanism, Plato, Cambridge Platonists

＊東洋英和女学院大学　国際社会学部　教授
Professor, Faculty of Social Sciences, Toyo Eiwa University

はじめに

小生は今年度末に定年を迎えるのであるが、あしかけ東洋英和女学院大学に９年勤務したことになる。他大学から本学に移転したのであるが、その理由はひとえにキリスト教学関連科目を担当したいからであった。それ以外の理由はなかった。念願が叶って、多くの科目を担当する機会に恵まれたが、その際に、ひとつの根本的な問題意識が私を規定していた。それは、はたしてキリスト教を教えるということはどういうことであるのか、そもそもキリスト教は教えることができるものなのか、ということである。この問題意識は、プラトンが『メノン』において提起した、アレテー（通常、徳と訳されるが卓越性のこと）は教えることができるのか、という問題と通底している。アレテーを通俗的な知識と同定するソフィストたちは、教えることができると思いなし、多額の報酬と引換に若者たちに知識を切り売りした。他方、アレテーを人間をして真に人間たらしめる卓越性と同定するソクラテスは、若者メノンとの問答の末、アレテーは教えることができないというという行き詰まり（アポリア）に至った。キリスト教を教えるということに関しても、同じことが言えるであろう。それが、あれこれの神学の知識を切り売りするだけのことであるならば、ことはかんたんである。しかし、それがキリスト者をして真にキリスト者たらしめているアレテーを教えるということであるならば、話は別である。キリスト者を生かす原動力としてのいのち・キリストのいのちは、教えることができるのであろうか。そのいのちの発現としての聖性、正義、愛情、歓喜、平和、要するに、善性は教えることができるのであろうか。このように考えるならば、行き詰まりに至らざるをえない。

キリスト教を教えるということは、以上に述べたようなジレンマに制約されているのであるという認識のもとに、私がとった授業方法は、一言でいえば、キリスト教とヒューマニズムの協働である。その意味は、一方において、キリスト教のアレテーを究極の目標として仰ぎ見る姿勢を堅持しつつ、他方において、教師も学生も神の前に立つ同じ人間であることを自覚しつつ、容易に到達することができないこの高貴な目標を目指して共に歩んでいく、ということである。それが私のいうヒューマニズムであり、真の知恵を愛し求め続けたソクラテスのピロソピア（愛智・哲学）の道行きと重なる。

以上に述べた観点から、私が担当した授業の中からキリスト教概論Ａ・Ｂを取りあげ、吟味を行いたい。

１　授業のテーマと内容

前期のキリスト教概論Ａは、キリスト教になじみのない多くの新入生を考慮し、授業テーマを「キリスト教の基本要素」と設定した。キリスト教を宗教的事象として観察するとき、数多くの要素が立ち現れてくる。それらのなかで重要なものをいくつかに絞るならば、聖書、讃美歌、祈り、キリスト者、キリスト教会あたりになるであろう。なかでも新約聖書は重要であるかもしれないが、それはキリスト教の歴史において最初からあったものではない。初めにキリスト者とキリスト教会が誕生したわけであるが、その頃に用いられた聖書はユダヤ教聖書であった。これはやがてキリスト教の側からは、旧約聖書と呼ばれるようになった。新約聖書はかなりの後発である。キリスト者たちは、新約聖書より先に、讃美歌を歌い、祈りを唱えていた。したがって讃美歌と祈りは重要なものであった。しかしそれらよりも重要なものは、キリスト者であると言わなければならない。なぜなら、もしキリスト者がいなかったならば教会はなかったであろうし、もしキリスト者がいなかったならば、聖書も讃美歌も祈りも生まれなかったであろう。そして現在、教会に集う者もいないであろうし、聖書を読み、讃美歌を歌い、祈りを唱える者もいないであろう。したがって、キリスト教の表面ではなく内面を学習するという局面においては、キリスト者とは何であるのかということに関する理解を深めることが肝要である。ところがこれはなかなか難しい課

題である。もちろんこの問題は授業のなかで取り扱われるが、キリスト者を理解するということは、一人一人のキリスト者を知るということであり、その魂のあり方を知るということである。これは授業のなかで容易になしうることではない。以上のようにあれやこれや考えた結果、以下の授業計画にしたがい学習を実施した。

第1回　キリスト教の基本要素
第2回　宗教の一つとしてのキリスト教
第3回　イエス像の多様性①：福音書のイエス像
第4回　イエス像の多様性②：福音書以外のイエス像
第5回　「善き者」としてのキリスト者
第6回　人類史の一断面としてのキリスト教史①：世界史のなかのキリスト教史
第7回　人類史の一断面としてのキリスト教史②：キリスト教の裏面史
第8回　ティンデールと聖書英訳
第9回　西洋古典の一つとしての聖書①：聖書概観
第10回　西洋古典の一つとしての聖書②：聖書学
第11回　音楽ジャンルの一つとしての讃美歌
第12回　観想の一形式としての祈り
第13回　キリスト教会の多様性①：キリスト教の教派
第14回　キリスト教会の多様性②：教会分裂の原因
第15回　全体のまとめ

後期のキリスト教概論Bは、社会の現実なかで私たちはいかに生きるべきであろうか、キリスト教は社会の現実にどのように働くことができるのであろうか、という観点から、授業テーマを「キリスト教と社会の現実」と設定した。以下の授業計画にしたがい学習を実施した。

第1回　キリスト教と社会の現実：キリスト教は何をすることができるか
第2回　欲望とイデオロギー：欲望の本性は何か
第3回　欲望の抑制：いかにして不必要な欲望を抑制することができるか
第4回　戦争の現実：世界の悲惨な現実に目を背けていないか
第5回　戦争の原因：どうして戦争は起こるのか。なぜ戦争はなくならないのか。
第6回　暴力の分析：人はどうして暴力をふるうのか
第7回　最貧諸国：サハラ砂漠以南の「最底辺の10数億人の現状」
第8回　ティンデールの英訳聖書
第9回　働く貧困層：日本に慢性的貧困問題があることを知っているか
第10回　子どもの貧困：日本は国際的に見て子どもの貧困率が高い国である
第11回　社会現象としてのクリスマス：日本にクリスマスが浸透した理由
第12回　福島原発事故と日本の現状：「喉元過ぎれば熱さを忘れる」
第13回　エネルギー浪費型社会：日本のエネルギー浪費の目に余る現状
第14回　脱・エネルギー浪費のライフスタイル：個人にできる節約は何か
第15回　全体のまとめ

前期･後期ともに、各回の授業題目のもとに、讃美歌、祈り、聖書輪読、授業題目に関する講義、DVD鑑賞の順序で学習を実施した。

2　讃美歌、祈り、聖書輪読

讃美歌は、諸宗教においてと同様にキリスト教においても不可欠な要素である。たとえ説教はときには心に届かないことがあるとしても、讃美歌は概していつでも心を打つ。私の担当するキリスト教概論は月曜日の1限と2限であるが、学生たちは月曜の朝が讃美歌で始まることを楽しみにしてくれた。主に外国語の讃美歌を学習し、共に口ずさんだ。*Amazing grace how sweet the sound*（アメージング・グレー

ス　なんと甘美な響きか）を、本田美奈子、白鳥英美子、ヘイリー・ウェステンラ、エルビス・プレスリーなどさまざまな歌手の歌声で鑑賞した。*Ave Maria*（アウェ マリア）は学生たちが大好きな曲目であった。

Ave Maria, gratia plena,	Hail Mary, full of grace,
Maria, gratia plena,	Mary, full of grace,
Maria, gratia plena,	Mary, full of grace,
Ave, Ave, Dominus,	Hail, Hail, the Lord
Dominus tecum.	The Lord is with thee.
Benedicta tu in	Blessed art thou among
mulieribus, et benedictus,	women, and blessed,
Et benedictus fructus	Blessed is the fruit of
ventris (tui),	thy womb,
Ventris tui, Jesus.	Thy womb, Jesus.
Ave Maria!	Hail Mary!

シューベルト版とバッハ／グノー版の両方で鑑賞した。学生も教師も、幼いジャッキー・エヴァンコの天使のような歌声に酔いしれた。

エルビス・プレスリー（Elvis Aron Presley, 1935-1977）の歌う「偉大なるかな　わが神」（*How Great Thou Art*）というゴスペルも好評であった。エルビスは、小さい頃から歌が好きであった。小学校の時、合唱隊に入りたいと願ったが、担任の先生から、「あなたのような歌い方をする人はだめです」と言われた。実は、エルビスは黒人のような歌い方をした。貧乏なため白人社会から差別された彼は、いつしか黒人に共感を覚えるようになっていた。たとえば、彼の特徴のはでな色シャツ、黒いズボン、白い靴は、黒人の服装である。エルビスは11歳からギターを始めた。ギターが彼の唯一の友であったが、意地の悪いクラスメートからギターを壊されたりもした。13歳の時、テネシー州メンフィスに引っ越した。そこは黒人音楽の中心地である。その地のアッセンブリー・オブ・ゴッド教会は、白人教会であるにもかかわらず、ゴスペルが歌われていた。それがおめあてで、エルビスは母親と一緒に熱心に教会に通った。そのかたわらペンテコステ派の黒人教会に通い、ゴスペルを十分に楽しんだ。黒人はエルビスを差別しなかった。

高卒後はトラックの運転手などの仕事をしながら、歌手を目指した。長い髪ともみあげは、トラック運転手のヘアスタイルである。20歳の時、レコード会社と契約した。黒人の歌を白人らしからぬパフォーマンスで披露した。PTAや宗教団体から非難を浴びたが、若者たちは自分たちの音楽だとして大歓迎された。その後の彼の成功は私たちが知るとおりである。晩年は体調不良のため、寂しい終局を迎えるが、ベッドサイドに、常に聖書を置き、哲学、オカルトの類の本もよく読んでいたそうである。彼ほど激しく非難され、また強く愛された人はいないが、彼の生涯をいつも支えていたのがゴスペルであった。彼はつねづね友人たちに、「ゴスペルは人を傷つけない」と言っていたそうである。1974年、40歳の時、「偉大なるかな　わが神」（*How Great Thou Art*）はグラミー賞を受賞した。

讃美歌と並んで祈りは、キリスト者にとってかけがえのない宝物である。キリスト教の祈りには、主の祈りや使徒信条のように礼拝やミサにおいて唱和される定型の祈りと、キリスト者が毎日の生活のなかで自分の言葉を用いる自由な祈りがある。後者は、キリスト者ではない人にとってはなじみのないものであろうと思うが、キリスト者にとってはなくてならないものである。そのことを学生たちが知っておくことは意味のあることであろうという観点から、授業においてあえて個人の祈りを紹介した。以下はそのいくつかの事例である。

平和を求める祈り（アシジの聖フランシスコの精神にもとづく祈り）

神よ、わたしをあなたの平和の道具にしてください。

憎しみのあるところに愛を　争いのあるところに和解を

分裂のあるところに一致を　疑いのあるところに信仰を

誤りのあるところに真理を　絶望のあるところに希望を
悲しみのあるところに喜びを　闇に光をもたらすことができますように。
わたしがあれこれ求めることをやめ　かえって　慰められるよりも慰めることを
理解されるよりも理解することを　愛されるよりも愛することを　望ませてください。
わたしたちは、与えることのうちに恵みを受け　ゆるすことによってゆるされ
自分を捨てて死に　永遠のいのちをいただくのですから。

ニーバーの祈り

神よ、変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては、それを受けいれるだけの冷静さを与えたまえ。
そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵を与えたまえ。

マザーテレサの祈り：愛を教えてください

主よ、騒がしいどらや　やかましいシンバルのようにではなく　愛をもって語るすべを　私に教えてください。
人を理解する能力を　山を動かすほどの信仰を　私にお与えください。いつも愛をもって。
忍耐強く、情け深い愛を　ねたまず、高ぶらず　自分の利益を求めず　いらだつことを知らない愛を。
真実を喜び、すべてを忍び、すべてを信じ望み、耐えるあの愛を　主よ、私にお与えください。
万物が滅び　すべてが明らかになる終末の日に　私が確信できますように。
弱かったにもかかわらずこの私が　主の完全な愛を　絶えずわが身に映し続け得たということを。

マザーテレサの祈り：富

深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。お金をあげるだけで満足してしまうことがないように。お金だけでは充分ではありません。お金なら自分でかせぐこともできますから。貧しい人は、仕えてくれるわたしたちの手を、愛してくれるわたしたちの心を必要としているのです。キリストの教えは愛、その愛を広めること。
ある人たちが豊かに生活できるのは、それなりの理由があるはずです。そのために働いてきたに違いありません。ただ、わたしはものが浪費されるのを見ると怒りを感じるのです。わたしたちなら使えるものを人々が平気で捨てるときに。
問題なのは、富んでいる人や裕福な人が多くの場合、貧しい人のいることをまるで知らないことです。ですから、その人たちをゆるせるのです。知るようになれば喜んで愛するようになり、愛は奉仕を生むからです。貧しい人のために心が動かないのは、貧しい人を知らないからです。
わたしは、金持ちがお金で手に入れるものを、愛によって貧しい人に与えよう努めています。一千ポンドのお金のためなら、ハンセン病患者に手を触れることは決してしません。でも神への愛のためなら喜んで心からその人を看病します。

このような祈りが、マザーテレサの愛の実践をその根底において支えていたであろうことが察せられる。

聖書輪読は、毎回の授業トピックに関連する聖書箇所を共に学習するためにとった方法である。新入生は、キリスト教概論の教科書として聖書を買うことになっているが、高いお金を出して買っていただいたからには、授業で活用しない手はない。ところが、これまで聖書に触っ

たこともない大部分の学生にとっては、当該の聖書箇所を開くということ自体が一仕事である。時間をとって聖書箇所を開き、順番にゆっくりはっきりと1節ずつ音読する。そのあと授業トピックに関連づけて聖書箇所の説明を行ったのであるが、意外にも、もっと詳しく聞きたいという反応もあり、私にとって励ましとなった。なおキリスト教概論の一環として、キリスト教の体験学習という位置づけで、学生たちに毎週1回のチャペル出席を求めた。はじめはいやいやながらであっても、出席を続けるうち次第にチャペルのよさがわかってきたというのが、おおかたの反応であった。

3　授業題目に関する講義

3．1　前期の講義：「善き者」としてのキリスト者

前期の講義は、多様な価値観を尊重する立場に身を置き、できるだけ広い視野からキリスト教を鳥瞰する姿勢を保つように努めた。この姿勢は、私が若い頃から吸収し続けてきたキリスト教的プラトニズムの精神によって培われたものである。その姿勢は、たとえば、「宗教の一つとしてのキリスト教 」という講義題目に表れている。キリスト教は、仏教やイスラム教と並んで三大宗教と言われたりもするが、最初から大きい宗教であったのではない。紀元1世紀前半、ユダヤ教徒のイエスとその仲間が、宗教改革運動を開始した。イエスの死後も、運動は継承され、イエスをキリストと崇める宗教団体、すなわちキリスト教会が成立した。それが歴史の経過のなかで発展し続け、大きな宗教となるに至ったのである。こんにちキリスト教の優位性を誇る人は、キリスト教も最初は小さかったということに思いをいたすべきである。そもそも宗教を大きいとか小さいとかいうような基準で評価すること自体が、まちがいである。世界には大小さまざまな宗教が存在するが、それぞれがそれなりの存在意義を有している。たとえある人が小さな宗教に帰依しているとしても、その人にとってはその宗教は大きい存在なのである。

そもそも日本宗教史においては、キリスト教は新参者であることを銘記しておかなければならない。日本にキリスト教が伝わったとされるのは、遅まきながら1549年である。この年の8月15日、ローマ・カトリック教会のイエズス会修道士シャヴィエル（ザビエル）らが、鹿児島に到着し布教を開始した。この時すでに、日本では仏教と神道が社会のなかに定着していた。日本に仏教が公式に伝わったとされるのは538年（552年説あり）であるから、日本において仏教はキリスト教より1000年以上も先輩である。神道はといえば、その起源はとても古く、「自然発生的」といわれたりもするが、これは不正確な表現である。おそらく縄文時代に始まり、弥生時代から古墳時代にかけて原型が作られたのではないかといわれている。ずっと長い間、幅をきかせていたが、仏教の到来によってけんかになった。蘇我氏と物部氏の崇仏排仏論争である。この時は崇仏派の蘇我氏が勝ったが、その後、仏教と神道はけんかを繰り返すも、やがてチャンポン状態になった。チャンポンの語源は、一説によると「異なるものを混ぜること」であるそうである。つまり、神仏習合が社会の中に浸透していった。今日、一般的日本人の宗教は、といえば、「仏教・神道」ということになるのではないだろうか。「無宗教」というのはあたっていないように思う。英語では、宗教に組しない立場を humanism（人間主義）という。さて、新参者であるローマ・カトリック教はけっこう歓迎され、1582年までに、信者数15万に達したといわれる。33年間で15万人、多いと見るべきか、新宗教としては普通と見るべきか。やがてキリスト教が禁止され、信者は密かに宗教を伝えていくも、信者の増加に歯止めがかかる。明治時代になり、諸外国の圧力によりキリスト教禁令が撤廃された。その結果、ローマ・カトリック教のみならず、正教やプロテスタント教諸派も布教を開始した。しかし、キリスト教が爆発的に広まることはついぞなく、今日に至っている。2012年度の『キ

リスト教年鑑』（日本キリスト新聞社、2011 年）によると、日本のキリスト教徒数は 106 万 169 名、対人口比は 0.845% である。いわゆる新宗教にも及ばない数字である。『図説　世界と日本の宗教』（学習研究社、2008 年）によると、新宗教の信者数が以下のとおりである。天理教：約 191 万 4000 人。大本教：約 17 万 3000 人。成長の家：約 87 万 3000 人。霊友会：約 442 万人。立正佼成会：約 600 万人。創価学会：約 750 万人。真如苑：約 84 万 6000 人。PL 教団：約 114 万 4000 人。世界救世教：約 83 万 6000 人。崇教真光：約 80 万人。信者数で見るなら、キリスト教は正教、カトリック、プロテスタントが束になっても、創価学会、立正佼成会、霊友会、天理教に遠く及ばない。太平洋戦争後、日本に布教にやってきたプロテスタント宣教師の中には、自分たちが日本の歴史・文化・宗教に関して無知であるにもかかわらず、それを棚に上げて日本の文化や伝統をばかにする無頼漢が大勢いた。キリスト教が広まらなかったゆえんである。彼らの布教によってキリスト信者が生産されたとしても、同様な無頼漢であったゆえんである。キリスト教は日本においては後発であり、少数者であることをわきまえ、「新参者でありますが、どうか末席をけがさせていただけませんでしょうか」という謙虚な態度をとるべきである。

3.1.1　イエス像の多様性

「イエス像の多様性」という講義題目にも、多様な価値観を尊重する姿勢を反映したつもりである。新約聖書にはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの 4 福音書が収録されている。各福音書のなかで示されているイエス像には、共通点もあるが相違点もある。講義においては相違点に注目し、それを尊重した。相違点にこそ独自のイエス像が表れている可能性が高いと思われるからである。この観点から見るとき、成立順序でいえば最初の福音書であるとされるマルコ福音書のイエスは、「神の子」でも「メシア」でもない。ましてや「神」ではない。しかし、病気・差別に苦しむ人びとを積極的に助けようとした人であったということは、読み取ることができる。弟子の獲得については、漁師を弟子にしたイエス像が特徴的である。マタイ福音書のイエスは、愛の実践を徹底しようとするも、現実のイスラエルに対して非寛容なイエスである。弟子獲得については、徴税人を弟子にしたイエス像が特徴的である。ルカ福音書のイエスは、救い主・殉教者としてのイエスである。弟子獲得ということではないが、羊飼いを引きつけたイエス像が特徴的である。ヨハネ福音書のイエスは、神の子キリストとしてのイエスである。弟子獲得については、ユダヤ教の長老を弟子にしたイエス像が特徴的である。このように異なるイエス像が新約聖書のなかに並存しているということは、大いに注目に価する事実である。それが新約聖書を編纂した人たちの意図であったかどうかは別として、たとえ相違点に着目せず、それを無視して福音書を読んだとしても、ほんとうに読んだことになるであろうか。違いがあるということは、福音書著者それぞれに独自のものの見方・考え方があり、違いとなって表れたということである。それは正統主義者から排除されるべき異端ではなく、かぎりなく尊重されるべき個性であり、個人の自由なのである。実際のところ宗教に帰依したために、視野が狭くなり、差別、排除、攻撃の人になってしまうのであれば、元も子もない。宗教などに入らない方がよかったのである。ほんとうに宗教に帰依するということは、真に宗教の精髄を自分のものにするということであり、かぎりなく視野が広くなることであり、公平、寛容、平和の人になるということでなければならない。

さらに、ヒューマニズムの観点からいえば、福音書のイエス像だけが純正のイエス像であると決めつけるべきではないであろう。プリンターのトナーにたとえるなら、私は純正品が高いので汎用品を愛用している。それで別に問題が生じたことはない。汎用品であってもそれなりの有用性と価値をもつのである。新約聖書の 27 書が正典として組み入れられていった歴史

の中で、選抜にもれた文書が数多くあった。いわゆる新約聖書外典がそれである。そのなかには、トマス福音書やペトロ行伝のような比較的知られた文書も含まれる。シェンキェヴィチ作『クオ・ウァディス（*Quo vadis*）』のなかに登場するペトロが、逆さまの姿勢で磔刑に処せられたという話をご存じの方もおられると思うが、その話の出典はペトロ行伝であることを知る人はどれくらいいるであろうか。最近では、マリアの福音書やユダの福音書の復元が進み、既成のマグダラのマリア像やイスカリオテのユダ像に再考をうながす契機となっている。話は新約聖書に戻るが、そこには福音書だけではなく、パウロの名に帰せられた 13 の書簡が収録されている。いわゆるパウロ書簡であるが、そのなかで真筆性が高いのは、ローマ書、コリント書 一、コリント書 二、ガラティア書、フィリピ書、テサロニケ書 一、フィレモン書の 7 つだけであり、他は疑似パウロ書簡と呼ばれ、真筆性が低いものである。しかし、真筆性が高いとされる書簡をとってみても、そこに示されているイエスは、復活して地上から天上に移動した存在であり、福音書にまがりなりにも示されている地上の存在とは大きくかけ離れている。それでいいのである。福音書のイエス像しかり。パウロ書簡のイエス像しかり、である。

もっといえば、初期キリスト教の時代には、ユダヤ教側は自分たちから分離していったキリスト教会に対して、背教者・新しい宗教の創設者としてのイエス像を露呈しようと試みたが、それはそれでありなのである。当時のユダヤ人たちはイエスをそのように見たということなのである。もちろんユダヤ教徒ならだれでもけしからぬイエス像を想念するわけではない。なかにはイエスに強い近親性を覚えた人たちもいたのである。たとえば、マルク・シャガール。その 1938 年の作品『白い磔刑』は、当時行われていたユダヤ人の迫害を生々しく告発している。シナゴーグは燃え、人びとは逃げ惑っている。ユダヤ教正典は放置されている。ユダヤ教徒たちはロシア赤軍によって弾圧されている。キリストがまとっている腰布は、ユダヤ教の礼拝で使用されるショール（タッリート）に、茨の冠はユダヤ教の伝統的な被り物に変えられている。この絵の基調をなしている白は、ユダヤ人にとって悲しみの色である。そもそもイエスはユダヤ人であったことをゆめゆめ忘れてはならない。パウロもユダヤ人であった。その他の宗教に目を移すなら、イスラームのクルアーンではイエスは預言者・神の僕として尊敬されている。宗教的寛容を旨とするヒンドゥー教徒であったガンディーは、イエスを熱心に平和を構築する人間として尊敬した。チベット仏教の最高指導者ダライ・ラマ 14 世も、イエスを平和をもたらす人として大いに尊敬している。「神は死んだ」で有名な哲学者ニーチェは、あらゆる固定したものを尊重しない自由な精神としてイエスを理解した。これまでのところキリストの聖画では、白い皮膚をもつ金髪のキリストが描かれることが多かった。いわゆる白人の人たちが描いたからである。もしそうであるなら、黒い皮膚の人たちが描く黒い皮膚をもつ黒髪のキリスト像が描かれてしかるべきであろう。現にそういう絵画が存在する。まことに当然のことである。調子に乗っていわせていただくなら、江戸時代の武士に絵筆を取らせ、見たことがないキリスト像を見よう見まねで描かせるならば、髷を結い羽織袴を身に着け、帯刀した姿を描くかもしれない。多様性の尊重は、多くの可能性を創出し、人類を豊かにするのである。

学生たちにとってキリスト教はなじみのない宗教であるが、仏教はそうではない。仏教と比べてキリスト教はどこが違うのかということは、彼女たちの関心であった。その関心に沿うものの一つとして、菩薩とキリストの比較の話をしたが、理解の役に立ったならば幸いである。以下に紹介するのは、チャペルで語った「イエスと地蔵菩薩」という題目の講話である。

ルカによる福音書 7 章 11 ～ 12 節は、一人息子に先立たれた母親の話である。その底知れぬ悲しみをだれが慰めることができるの

か。イエスという宗教家がそれである、というわけであるが、どうもピントこない。いったいイエスとはだれなのか、どんな人なのか。しかし、もしイエスという人はお地蔵さんのような人だといわれるなら、少しはわかる気がする。お地蔵さんとは、地蔵菩薩のことである。地蔵菩薩は、あの「賽の河原」の仏教説話と関係がある。

親に先立って亡くなった小さい子どもが、この河原で母親や父親をいとおしみ、小石を積んで塔を作ろうとするが、石を積むとすぐに鬼がきてこわしてしまう。この説話は昔から「地蔵和讃」として庶民のあいだで歌い伝えられてきた。「お母さん、お母さん」と泣き叫ぶ幼子を鬼は容赦なくいじめ続ける。この苦しみをどうしたらいいのだろう。「地蔵和讃」は次のようにいう。

地蔵菩薩にまさるものはない。
遥か谷間の彼方から　光り輝き尊いことに
幼子の前にお立ちくださり　いわれた
もう泣かなくてもいいよ　幼子たちよ
おまえたちは短いいのちで　冥土の旅にきた
生ける者の国は冥土から遠く離れている
わたしを冥土の父母と思って過ごし　頼りなさい
こういって　幼子を着物の裾の中にかき入れ
まだ歩けない幼子を手に持つ杖の柄に取りつかせ
慈しみに満ちた胸に抱きかかえて撫でさすり
憐れみたまう　なんとありがたいことか
子どもに先立たれて悲しければ　西に向かって手を合わし祈りなさい
残された私のいのちが終わるときには　子どもと一緒に天国に導いてください
地蔵菩薩さま　朝に夕に仏壇に念仏を称えなさい　南無阿弥陀仏と

「南無」はインドの言葉の namas に由来し、「おまかせします」という意味である。南無妙法蓮華経でもいいし、イエス・キリストさまでもいいのである。

3.1.2 「善き者」としてのキリスト者

多様な価値観を尊重するということは、個々の価値を尊重し、それを生かすということではあるが、それは、どんな価値でもかまわないという相対的価値観の立場に甘んじるということではない。価値そのものにたいして、そういうものは自分には関係がないというような部外者の態度をとることではない。むしろそれは、個々の価値を尊重するがゆえに、自分にとって重要であると思われる価値に主体的に関わることなのである。この主体的関わりという姿勢は、他でもなく自分が選択する価値をできるだけ広い視野から鳥瞰すると同時に、それを深く掘下げその本質に到達しようと努めることでもある。「「善き者」としてのキリスト者」という講義題目は、キリスト者という存在に関するそのような鳥瞰と本質的掘下げの努力を反映している。キリスト教を構成している主要な要素は何であるかというならば、さしあたりキリスト教会、キリスト教指導者（司祭や牧師）、キリスト者、聖書、讃美歌などが考えられる。なかでも重要なものは、キリスト者であろう。なぜなら、もしキリスト者が存在しないならば、建物としての教会は存在するとしても、キリスト者の共同体としての教会は存在することができない。もしキリスト者が存在しないならば、キリスト教指導者は存在しないだけではなく、その必要もなくなる。聖書も讃美歌も存在する意義を失う。歴史的に考えるなら、そもそもキリスト者が存在するようになったからこそ、やがて聖書や讃美歌が生まれたのである。はじめから聖書や讃美歌が存在したのではないのである。キリスト教会、キリスト教指導者、聖書、讃美歌の存在は、キリスト者あっての物種なのである。こんにちキリスト教が、イスラームや仏教と並んで世界三大宗教と言われたりするのは、世界中に

存在するキリスト者たちのゆえなのである。キリスト者こそは、キリスト教における最も重要であるとともに、不可欠な要素である。キリスト者が存在しなければ、キリスト教は存在することができない。

しかし、そのキリスト者という存在が問題なのである。キリスト者といえば、かつてキリスト教の十字軍が略奪と殺戮をほしいままにしていたとき、平和構築に身を挺したアシジのフランシスコを連想する人もいるであろう。しかしながら、ここで謙虚に受けとめなければならない歴史の真実を思い起こしたい。それは、フランシスコがキリスト者であるなら、暴虐の徒と化した人たちもキリスト者であるということである。中世以後行われるようになった異端尋問からも目を背けてはならない。キリスト教の改善のために立ち上がったヤン・フスのような人もキリスト者であるなら、彼に異端のレッテルを貼り、ついには火刑に処したキリスト教正統派の人たちもキリスト者なのである。いったいキリスト者とは何であるのか。この本質に関わる問いは、哲学・倫理学からの問いである。キリスト者とは何であるかと問うことは、キリスト者はいかにあるべきかを問うことであり、またキリスト者はいかに行動すべきかを問うことでもある。これに答えることは容易ではない。まず問う人自身がキリスト者であるのか、そしてキリスト者であるなら、どのような心のあり方をもつキリスト者であるのか、さらに同時代においてどのような生き方をしているキリスト者であるのかという問いを、他でもなく自分自身に問うことをよぎなくされるからである。このように考えてくるとき、そもそもキリスト教は教えることができるのかという根本的な問題を問うたときに遭遇したのと同様なアポリアに帰着する。キリスト者であることは可能であるのかという問いは、前途にアポリアがちらつく問いなのである。逆に言えば、この問いに即答できる人は、答えをもっているようではあるが、実は正解からは今なおほど遠い所にいる人であるということになるであろう。

それでは哲学・倫理学の観点からは、キリスト者の本質をどのように措定することができるであろうか。私はひとつの作業仮説として、キリスト者とは「善き者」であると措定してみたい。新約聖書の中にイエスが語ったとされる「ひとり神以外はだれも善き者ではない」という文言がある（マルコ 10 章 19 節）。新約聖書にしては考えさせてくれる言葉である。これをどのように解釈すべきであろうか。神以外は、天使であろうと人間であろうとすべからく悪しき者である、という意味に解釈すべきではないであろう。天使はさしおき、人間にかぎっても、完全に善き者はいないにせよ、それなりに善き者がいることは否定できないであろう。たとえばガンディーやマザーテレサはその部類に入れてよいであろう。日本の空海、日蓮、道元、白隠なども同様であろう。神の善性と比較するなら、人間の善性などはとるにたらない小さなものであるかもしれないが、それでも人間の善性を完全に否定し去ることはできない、と私は考える。この点を踏まえ、改めて「ひとり神以外はだれも善き者ではない」という文言を考察するなら、これをひとり神だけが絶対的に善き者であるという意味に解釈することができるかもしれない。つまり神の善性は絶対的であり、対をなさないということである。神だけが真の意味において善き者であるということである。もし人間の善性がロウソクの火の明るさであるなら、神の善性は太陽光の明るさ、いやそれを無限倍した明るさにたとえることができるかもしれない。ただし、それほどまで神の善性は絶対的であるとしても、それは神の善性と人間の善性との断絶・無関係を意味するのであってはならない。神の善性はいかに至高であろうとも、それは人間の領域に関わり、人間を惹きつけることができるのでなければならない。人間の善性がいかに卑小なものであろうとも、それは神の善性を思考することができるべきなのである。やや理屈っぽい話になったが、要するに、「ひとり神以外はだれも善き者ではない」という文言は、最高善としての神を措定した文言で

あると解釈することができる。たとえば、西洋哲学には、神を最高善とする系譜がある。プラトンは、「神は善であり、善きものの原因・贈り主」であると語り（『国家』）、「神々は最善のものである」とも語った（『法律』）。プロティノスは、究極の実在として「一なるもの」としての神を措定し、それを最高善と同定した（『善なるもの一なるもの』）。アウグスティヌスは、「幸福な生とは最高善を楽しむこと」であると語った（『告白』）。アンセルムスは、「最高の善を記憶し、理解し、また愛するほどに優れたことはできない」（『プロスロギオン』）と語った。トマス・アクゥイナスは、「『神』という名称には何か無限の善という意味が含まれている」と語った（『神学大全』）。なかでもプラトンは叡知界に実在する究極の善として善のイデアを措定し、それと感性界における個々の善とのあいだに相関関係を認めた。たとえば感性界に存在する善き者が善き者であるのは、その者が自然本来に善き者であるからではなく、叡知界に実在する善のイデアを分有しているかぎりにおいて善き者なのである。これがいわゆるイデア原因論であるが、この仮説は神に属する絶対的善性と人間に属する相対的善性とのあいだに、相関関係の可能性を開くものであると解釈することができるかもしれない。

新約聖書のなかに「あなたたちは神的本性を分有する者となる」という文言があるが（『ペトロの手紙 二』1章4節）、この文言も、最高善としての神的本性を人間が分有することができる可能性を示すという観点から、理解することができるかもしれない。「神的本性を分有する者となる」という考え方は、のちにギリシャ教父たちによって展開されることになる「神化」（ギリシャ語で theōsis、ラテン語で deificatio）の思想に結びつくものである。エイレナイオスはこの聖書箇所に基づき、神が受肉において私たちの生に与ったように、私たちも神的な生に与り、「神があるところのものになる」という思想を展開した（『異端論駁』）。さらにアレクサンドリアのクレメンスは、この概念を「神に似ること」というプラトンの思想に結びつけた（『教師』）。このようにして神化の思想は展開していくわけであるが、その基調はアタナシウスが言うように、「ことばは神となった・・・それは私たちがその御霊に与り、神化されるためである」という理解である（『ニカイア公会議の決議に関する手紙』）。イエスのなかに実存する神的な生に与ること、それが神化なのである。

この関連でケンブリッジ・プラトニストの思想をご紹介したい。17世紀イングランドにおける内戦とそれに直結する時代に、動乱から一定の距離を保ち、哲学をこよなく愛した一連のキリスト者たちがいた。その多くは、ケンブリッジのエマニュエル学寮（Emmanuel College）においてプラトニズムの思想を学び、学寮チャペルや学外の教会で含蓄のある説教・講話を行った。それによりケンブリッジ・プラトニスト（The Cambridge Platonists）と呼ばれる。これに属すると見なされる学徒たちは、ベンジャミン・ウィチカット（Benjamin Whichcote, 1609-1683）、ジョン・スミス（John Smith, 1616-1652）、レイフ・カドワース（Ralph Cudworth, 1617-1685）、ナサニエル・カルヴァウェル（Nathaniel Culverwell, 1618?-1651）、ヘンリー・モア（Henry More, 1614-1687）、ピーター・ステリー（Peter Sterry, 1613-1672）の6名である。たとえば、ウィッチカットは、キリスト者のあるべき姿に関して考察を深め、ギリシア教父たちの神化の思想を参考にし、キリスト者であるということは、最高善である神の本性を分有し、神に似る者となり、善を行うことにおいていやましに成長していく者になるということである、と語った（『ウィチカット全集』）。ウィチカットの考えをさらに推し進めたのが、スミスである。彼はキリスト者の本質を考察するにあたり、「善き者、すなわち宗教（の高貴性）によって始動される人は、この世とそれに属するすべての楽しみ・卓越を超出して生きます」と語った（『真の宗教の卓越性・高貴性』）。彼はキリスト者の本質を「善き者」と措定する。宗教の高貴性は、通俗的な教理・教義や宗教体

制や豪華な建物に還元されない。宗教の高貴性は人間を抜きにしてはなりたたない。高貴な人間なしには、宗教の高貴性はなりたたない。そして宗教の高貴性を保有する人間を本質論の観点からどのように表現すればよいのであろうか。一般に流通している「キリスト者」という名称では不十分である。なぜならキリスト者といっても、高貴な者もいれば低俗な者もいるからである。スミスが問うているのはその呼称の中身なのである。どのような魂のあり方をもち、どのような行動をするキリスト者であるのかということが、問題なのである。そこで彼が選んだのは、「善き者」という名辞である。その場合、彼が強調することは、魂のあり方と行動の一致である。善き者においては魂の善きあり方は必然的に善き行動として現れてしかるべきである。ひるがえって外に現れた善き行動は、魂の善きあり方から発動したものでなければならないのである。

キリスト者の本質の探究に関しても、キリスト教と仏教の比較の観点を取り入れる努力をした。以下に紹介するのは「キリスト者と菩薩の共通点」という題目のチャペルで語った講話である。

> キリストに見られる利他的な心は、日本の仏教文化のなかで育った私には「菩薩」を思い起こさせる。観音菩薩、弥勒菩薩、文殊菩薩、普賢菩薩、日光菩薩、地蔵菩薩などがある。菩薩とは、サンスクリット語の「ボーディサットヴァ」（bodhi sattva）が訛ったものである。ボーディ（菩提）とは悟りのことで、あらゆる欠点がなくなり、あらゆる美徳を備えた状態を意味する。サットヴァ（菩埵、サッタ）とは、勇気と自信をもち、生きとし生けるもののために悟りを得ようと励む人のことをいう。つまり、菩薩とは、生きとし生けるものの究極の利益のために悟りを得ようという、自発的で真摯な願いをもった人々のことをいう。菩薩は、智慧によって心を悟りに向け、慈悲によって生命あるものを気にかける。他者の利益のために完全な悟りを得たいというこの願いは、菩提心と呼ばれる。
>
> 完全な悟りを得た人が、ブッダとしての釈尊である。釈尊は、最初から悟りを得ていたわけではない。悟りを得るためにすさまじい努力をした。釈尊の前世物語（ジャータカ）によると、釈尊の前世の一つは、マハーサットヴァ（偉大な菩薩）という名の王子だった。あるとき、マハーサットヴァは、林の奥で飢えた母親の虎と７匹の子どもの虎を見た。子どもたちはやせ細っており、まさに命が絶えようとしていた。やさしい心をもったマハーサットヴァは、虎たちの前に身を捧げた。しかし、虎たちは王子の大きなあわれみに感じて、とうてい彼を食べることができなかった。そこでマハーサットヴァは、乾いた竹で自分の頚を刺して、身体を高い山のうえから虎たちに投げ出した。虎たちは涙を流しながら王子の身体を食べた。釈尊は、生まれ変わってからも、努力を重ねた。何度生まれ変わっても、あきらめることなく悟りを得る努力を継続した。その結果、ついに悟りを得た。すなわち、ブッダに到達した。
>
> ブッダになるまえの段階が、菩薩である。いきなりブッダになることは不可能であるが、だれであれ菩薩として善い生き方を積み重ねていくなら、ブッダになることができるという希望がある。
>
> 今日の聖書の言葉（『フィリピの信徒への手紙』２章４節）も、同じ方向を指さしているように思われる。私は偉大なキリストになることはできないが、キリストを模範として、一人の小さなキリストになりたいという願いをもつことはゆるされる。その願いを新たにしたいと思う。

善き者としてのキリスト者は、今ここでわずかばかり善き者であることに安住せず、日々さらに善き者になっていくべく向上の道行きを継続する者でなければならない。キリスト者という名称は、自己の魂における無知と汚れを覆

う隠れ蓑であってはならない。それは、それを名乗る者をしてたゆむことなく最高善としての神を目指して上昇せしむる霊的起動力なのである。霊的起動力とは、キリスト者の内に宿る神の霊の力という意味である。そのような意味のキリスト者を目指して生きている、現代における典型の一人は、スイスの哲学者ハンス・キュング（Hans Küng, 1928 ～）であろう。

テュービンゲン大学のカトリック神学部で教えていた彼が、教皇の無謬性の批判したためカトリック神学を教える資格を剥奪されたことは、キリスト教界では周知の事実である。彼はその著『なぜ私はまだキリスト者であるのか（*Why I am still a Christian*. Abingdon Press, 1986）』において、キリスト者を「善き闘士」として措定している。その意味は、悪と不正に満ちた現代世界のなかで、武器ではなく神的善性によって平和な世界を実現するために奮闘する人ということである。キュングによると、善き闘士とは、人間の尊厳への尊敬を確保するために闘う人である。愛敵に至るまでにである。抑圧からの解放のために闘う人である。無私の奉仕に至るまでにである。正義のために闘う人である。自発的に自己の権利を明け渡すに至るまでにである。私欲と闘う人である。自分の所有物を放棄するに至るまでにである。あらゆる紛争の和平のために闘う人である。無限の和解に至るまでにである。このように善き闘士としてのキリスト者をキュングは提唱し、それに基づく活動を展開している。世界諸宗教と積極的に対話を行い、それらへの理解を深め続けてきた彼は、1990 年代初期、「世界倫理」（Weltethos, Global Ethic）プロジェクトを立ち上げ、世界諸宗教の共通点を強調し、万人が共有できる最低限の行動規範を作成することを目指した。その理念については、『世界倫理に向けて：最初の宣言（*Towards a Global Ethic: An Initial Declaration*）』に明らかである。

３．２　後期の講義：「善き闘士」としてのキリスト者

後期の講義は、キュングにおいて確認できる善き闘士としてのキリスト者という理念に沿って、問題が山積する社会の現実なかで、善き闘士はいかに生きるべきであろうか、何を行うことができるのであろうか、という問題について学習した。あまた存在する問題のなかでも特に深刻なものは、紛争と戦闘であろう。世界には今なお 100 以上の紛争地があり、その多くにおいて戦闘と殺戮が繰り返されている。なぜ人間は戦うのであろうか。殺すのであろうか。その根本的原因は欲望である。新約聖書の中にも、人間は欲しいものが自分の手の中にないとき、それを獲得するために争い、人を殺すに至るという観察が述べられている（『ヤコブの手紙』4 章 1 ～ 2 節）。人間ならばだれしも「欲しいと思う心」としての欲望をもっている。食欲、睡眠欲、性欲、所有欲などはだれにでもあり、一概に悪いものであると決めつけることはできない。むしろそれらは人間の生存と人類の生き残りのために必要なものである。人間は欲望をもたないことはできない。欲望をもたないということは死ぬということに等しい。問題は、欲望は膨張する性質をもつということである。それは、自己を拡張し続け、止まるところを知らず、他者を傷つけ殺すことをしてでも自己を貫徹しようとする強い傾向をもつ。もちろん欲望は抑制されなければならないが、そのためにはどうしたらよいのかが問題である。善き闘士はいかにして欲望と戦い、それを抑制することができるであろうか。「 欲望の抑制：いかにして不必要な欲望を抑制することができるか」という講義題目は、この問題の解明に関わる学習である。

3.2.1　欲望の抑制：いかにして不必要な欲望を抑制することができるか

この問題を学習するにあたり、手がかりとしてウィリアム・B・アーヴィン著　竹内 和世訳『欲望について』（白揚社、2007 年）を使用した。アーヴィンはストア哲学を研究する米国

人である。彼は欲望と他者との密接な関係に注意を喚起する。あまたある欲望の中でも金銭欲、名誉欲、快楽欲は代表的なものであるが、それらがあるのは「他者」が存在するからである。もし他者が存在しないなら、大金持ちになろうと思うであろうか。有名な人になろうと思うであろうか。セックスをしようと思うであろうか。他者が存在しないなら、化粧をしなくなるであろう。ヘアスタイルを気にしなくなるであろう。つまり社会の中に生きるからこそ欲望がある。その意味では、欲望とは社会的ステータスを獲得するための競争なのである。それではなぜ、社会的ステータスへの競争に駆り立てられるのか。アーヴィンは、「答えは私たちの進化の過去のなかにある。社会的ステータスを大切にした私たちの祖先は、そうでなかった者よりいっそう異性をひきつけ、それゆえ子孫を残すためのより大きな可能性を手に入れた」と説明する。進化の過程の結果、人間には「生物学的誘因システム」(the biological incentive system, [BIS])が埋め込まれている、とアーヴィンは言う。それは、生き残り、子孫を残す行為を「快」と感じ、それを妨げる行為を「不快」と感じる生得的な性質である。なぜセックスが快感をもたらすのか。もしそれが不快であったなら、オルガスムではなく鋭い苦痛をもたらしたなら、人は子孫を残せず、進化の先祖になることはなかったであろう。なぜ火傷をすると不快なのか。もしそれが気持いいものであったら、苦痛ではなくオルガスムをもたらしたなら、人は火傷で死ぬことになり、子孫を残すチャンスもないであろう。進化の先祖になることはありえない。進化の過去の結果、生き残り、子孫を残す欲望が人間のなかに埋め込まれているので、自分の環境がどんなものであれ、それに満足しないように配線されている。BIS とは生得的な不満傾向であり、何を手に入れても、もっと欲しがらずにはいられないのである。

アーヴィンは欲望というものを以上のように分析したうえで、欲望とどのようにつきあっていくか、BIS をもったままでもっともよく生きるにはどうしたらよいか、と問う。彼は、以下の三つの選択肢を提示する。

①快楽主義者になる。

②禁欲主義者になる。

③快楽主義と禁欲主義の中道。

アーヴィンが推奨するのは、③快楽主義と禁欲主義の中道、である。これはとりもなおさず釈尊が推奨したものである。原始仏典のなかに「蜂が花の蜜を採るとき、ただ蜜だけを採って、花びらや香りを損なうことはない。そのように人生の必要を充足させよ」という文言がある(『法句経』第 49 番)。八正道を示唆する文言である。八正道とは欲望を止滅するための 8 つの道・方法であり、正見(正しい考え)、正思(正しい意志)、正語(正しい言葉)、正業(正しい行い)、正命(正しい生活)、正精進(正しい努力)、正念(正しい注意)、正定(正しい集中)を含む。このライフスタイルを採用すれば、ただちに欲望を抑制できるということではない。八正道を長年にわたりゆるやかに修行し続けていけば、しだいに変わっていくということである。こと欲望の抑制に関しては、アーヴィンがキリスト教やイスラームではなく、仏教に着目したことはもっともであると思われる。キリスト教やイスラームにも禁欲の教えはあるが、欲望の抑制に関する具体的な方策はない。仮にあるとしても、神の意志に従って己の欲望を抑制するなら、報酬として天国へ行ける。天国では望ましい欲望を満足させることができる、というような人を煙に巻く話である。それにひきかえ仏教の八正道の教説は、地に根ざしている。

アーヴィンは仏教の教説を踏まえて、それを彼の専門分野であるストア哲学へ展開する。ストア哲学は幸福な生活を目的とする。目的達成の鍵は、欲望の抑制である。それによってもたらされる報酬としての幸福は、「心の平静」である。それでは、どうしたら欲望が抑えられるのか。アーヴィンは、エピクテトス(後 55-135)とセネカ(前 4 頃 - 後 65)を紹介する。エピクテトスは、古代ギリシアのストア哲学者である。著作はないが、弟子アリアノスの

筆録した『語録』（*Diatribai*）と、それを要約した『ハンドブック』（*Encheiridion*）が残存している。人間はいろいろなものを欲しがる生き物であるが、エピクテトスは「宿命論」的姿勢をすすめる。「ものごとには、自分の力で何とかなるものもあるが、自分の力ではどうにもできないものもある」。後者について悩むのは時間とエネルギーの浪費である。もっぱら前者にのみ時間とエネルギーを注ぐべしという。人間は社会のなかで生活しているかぎり、とかく他者との関係で悩みがちであるが、エピクテトスは、「あなたについて、だれが何と言っても、けっして気にしてはいけない。それはあなたと関係がないからだ」という。彼は欲望の膨張に対する予防として、強欲な人物を避けるべきことをすすめる。不健全な欲望は伝染病のようなものであるから、名声や富への渇望という病気にかかっている人物を避けよという。衣食に関する欲望もたえず人間にまとわりつくものであるが、エピクテトスは、「貧しさの実践」をすすめる。ときどき質素な食べ物を食べ、質素な衣服を身に着けるという期間を作ってみる。それから、自分に尋ねる。みながいつも恐れているのはこれなのか、というのである。

アーヴィンが紹介するもう一人は、ローマ帝国のストア哲学者セネカである。彼は政治家、詩人でもある。セネカは飽くことなき欲望を克服するためには、自然の欲望と不自然な欲望を区別すべきことを提言する。たとえば、のどが渇いたとき水を欲するのは自然の欲望であるから、水を飲めば渇きはいやされる。一方、富を欲しがるのは不自然な欲望である。それは飽くことのない欲望であるから、不自然な欲望を満たす行動に移る前によくよく考えるべきであるという。彼は『怒りについて』という論文のなかで、怒ったら10まで数をかぞえることをすすめている。また一日の反省をすることをすすめている。「自分の心に問う。今日一日、おまえの内なるどの病を直したか？　どの欠点に抵抗したか？　どこに改善を示すことができたか？」。セネカの提言はありきたりのものではあるが、それだけだれにでも実行できそうなものばかりである。これならば特定の宗教を信奉しないヒューマニストであっても、試してみることができるであろう。欲望の抑制に関しては、宗教の祈りと哲学の理性は、あれかこれかの関係ではなく、共闘する戦友であると見るべきである。なお参考までに、アーヴィンは、ストア派の生き方を現代に適用した『良き人生について　ローマの哲人に学ぶ生き方の知恵』（白揚社、2013年）という本も出版している。『欲望について』と併せて読んでみるとよいと思う。

くどいかもしれないが、欲望の抑制に関しては仏教から学ぶところが多いと思う。仏教には「我執」（がしゅう）の放棄の教説がある。我執とは、明日のいのちも知れぬ自己を永遠不変のように錯覚して執着することである。他方、自己にこだわらないあり方、我執の放棄が「無我」である。道元禅師（ぜんじ）の『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』に、「仏道の修行をするということは、自己を探求することである。自己を探求するとは、自己を忘れることである」と書いてある。自己を忘れるということは、自己の我執を捨てることであると考えていいと思う。自己の我執を捨てるということは、新約聖書の『ルカ福音書』12章16～17節に登場するあの強欲な地主のように、「私、私」と自分で自分を押し出すことをしないということである。むしろ自然にまわりから押し出されるのでなくてはならない。自分からやるというのではない。自分から社長になるというのではない。自然にまわりの人が放っておかなくなる。世間が放っておかなくなる。そういう生き方を我執を捨てるという。私がやるとか、あの人にやってもらうとかいう意識があるあいだは、まだ我執が脱落しているとはいえない。自分がやっていても自分がやっているという気がしない。人のためにやってあげても、それは自分のためにしている。自分のためにしていることが、ちゃんと人のためになっている。「隣人愛」を実行したぞ、などとはゆめゆめ思わない。仏教の信仰がどうのこうの、キリスト教の信仰がどうのこうの

ともいわない。それでいて、その何の意識もないはずの自分の生活が、どんどん大きく広く伸びていく。世間が黙っていないで、どんどん伸ばしていってくれる。そしてその人の人柄がどんどん深くなっていく。こういうことである。1831年、良寛上人（良寛さん）が74歳で亡くなったとき。会葬者は1000人に及んだという。注目すべきは、真言宗、浄土宗、浄土真宗、日蓮宗などいろんな宗派のお坊さまがお葬式に参列していることである。良寛さんは禅僧でありながら、宗派や僧籍にこだわることなく生きた。その我執の脱落した自己を忘れた生き方が、異なる立場に身をおく人々をも魅了したのだと思う。（［参考］紀野一義『いのちの風光』）

3.2.2　戦争の原因：どうして戦争は起こるのか。なぜ戦争はなくならないのか。

善き闘士にとって、今なお世界の100以上の地域で行われている紛争の現実を前にして、それらから目を背けず直視することが重要であるが、同時に紛争や戦争の原因を分析することも重要である。「戦争の原因：どうして戦争は起こるのか。なぜ戦争はなくならないのか。」という講義題目は、戦争の原因分析に関する学習である。私は太平洋戦争後に生まれたが、まだ子どもであった頃、敗戦後の余韻が残っていた。大人から戦争の手柄話や敗戦の悔しさをよく聞かされたものである。そこには侵略戦争への反省はみじんもなかったように思われる。映画評論家・教育評論家の佐藤忠男氏は、そういう人たちとは異なる。1930年生まれの佐藤氏は、子どもの頃、軍国主義教育をつぶさに体験し、あと数年で徴兵というところで、敗戦を迎えた。彼は戦争を真剣に反省している戦中派の一人である。佐藤 忠男著『戦争はなぜ起こるか』（ポプラ社、2001年）には、その反省が明快に語られている。なかでも佐藤氏が指摘する以下の諸点は、熟考に価する。以下に私自身のことばを交えながら紹介したい。

（1）国民の無知

明治維新以後、日本は日清戦争（1894～1895）、日露戦争（1904～1905）、そして日中戦争（1937～1945）を行ってきた。日中戦争はなぜ起こったのか。日本は中国をバカにした。政治家たちは戦争にはやる軍人を抑えることができなかった。さらに佐藤氏は、国民の無知を指摘する。当時、日本の国民はいったい、どう考えていたのであろうか。日本人が朝鮮や中国で行った数々の悪事は、日本の新聞やラジオではけっして報道されなかった。報道されたのは、日本が朝鮮人や中国人を指導して、新しいアジアの国を作っている、という類の話ばかりであった。内務省という役所が、ラジオや新聞を統制していた。だから、日本はアジアの解放のためにいいことをしているのだ、といい気持ちになり、兵隊たちが悪いことをやっている、と聞いても、あまり気にしなかった。いったん、日本のやっていることは正しい、と思い込むと、なかなかその思いこみは変わることができなかった。ほんとうのことを伝えなかった報道も報道であると同時に、自分の都合のよい話だけを鵜呑みにして、真実を知ろうとしなかった国民も国民であったと、佐藤氏は指摘する。

このことに関連して、私は靖国神社に附設されている「遊就館」に言及したい。戦時中の国民の無知を知るには、この施設に行くのがよいと思う。私は研究のため何度か遊就館を訪れたが、いつも外国人来館者が多いのが目につく。それに比べて日本人の少ないことがとても気になる。実際、本学の学生たちに聞いてみても、遊就館の存在を知っている人は少数である。ともあれ建物に足を踏み入れるやいなや、軍事色と日本讃美の勢いに圧倒されるであろう。遊就館自身の説明によると、「明治15年我が国最初で最古の軍事博物館として開館した遊就館は、時にその姿を変えながらも一貫したものがあります。一つは殉国の英霊を慰霊顕彰することであり、一つは近代史の真実を明らかにすることです」となっている。見過ごしにできない言葉が少なくとも三つ使われている。一つは「軍

事博物館」。日本の戦争は正しかったことを証明する博物館という意味である。次に、「殉国の英霊を慰霊顕彰する」。日本国のために命を捨てた兵士たち、すなわち、日本国のために外国の人たちを殺した兵士たちを「英霊＝神」(heroes) として祀るということである。れっきとした宗教施設である。運営のお金はどうしているのであろうか。「運営資金は国民の「お賽銭」や「寄付」で賄われている」という。具体的には、200 万人いるいう戦没者（祭神）遺族の寄付（会費）が主な収入源であるが、赤字傾向が続き、会員の高齢化が進んでいるので、このままでは倒産する恐れがある。そのため、靖国神社を再び国有化にしようという動きが政治家の中にも見られる。さらに、「近代史の真実を明らかにする」。そうはいうけれども、実際には真実を隠し、ところどころうそで塗りつぶしている。遊就館を一回りしてみると、まず第一に、日本軍「慰安婦」に関する記録がまったくない。第二に、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下に関する記録はほんの少しだけで、写真はない。つまり、都合の悪い真実は隠し、もっぱら軍国主義の理念を宣伝しようとする、昔ながらのやり方である。遊就館にかいま見ることができる戦争賛美が、戦時中は全国至るところで、隅々まで、したがって、小学校にまで浸透していた。

（2）戦時中の教育

今の小学校は、戦時中、国民学校と呼ばれた。1941 年 4 月 1 日、国民学校令の施行により従来の小学校が改組され、国民学校が発足した。佐藤氏は、軍事色の強い教育をつぶさに体験したわけである。子どもたちは国家によって、当時、日本が行っていた戦争は「正義の戦争」であることをたたき込まれた。軍国主義教育のために用いられたのが、「修身」の教科書であった。国家の指導により、子ども向けの本も軍事美談のようなものばかりであった。日本軍は正義の戦争を戦っているので勇敢で強く、中国軍は邪悪な戦争をしているので鬼のように残忍である、という調子であった。その辺の事情に関しては、山中 恒（ひさし）『子どもたちの太平洋戦争―国民学校の時代―（岩波新書）』が、当時の教育の実態を赤裸々につづっている。こんにち 2 月 11 日は「建国記念の日」と制定されており、多くの人にとっては祝日の一つにすぎない。関心のある人たちにとっては、賛成派と反対派がそれぞれ、屋内の施設で集会を行う日である。しかし、少し考えるだけでも、なぜ 2 月 11 日であるのか、いつをもって日本建国の年とするのかは謎である。知る人ぞ知るように、建国記念の日はかつては「紀元節」であった。1940（昭和 15）年、侵略戦争に勢いをつけるため「紀元 2600 年奉祝祭」が国家行事として行われた。「紀元 2600 年」というのは、第一代神武天皇が即位し、日本国を始めてからこの年が 2600 年目にあたる、といかさまくさい算出がなされた。はっきりいって、なぜ 2 月 11 日であるのかはまったく根拠がない。建国記念の日にあたる、辛酉元旦（西洋暦に直すと紀元前 660 年 2 月 11 日）に、イワレビノミコト（神武天皇？）が大和の橿原（かしはら）の宮で即位したとされ、そこから 2 月 11 日を「建国記念の日」に定めたという説もある。しかし、歴史学上では神武天皇は、実在の人物ではなく「神話」の人物として位置づけられていることは、今日の常識であろう。

軍国主義教育の根幹をなすものとして、1890（明治 23）年に発布された「教育勅語」があった。今日でも、識者のなかには、教育勅語の内容は基本的に正しいという人もいるが、いったい何を考えているのであろうか。教育勅語とは、教育に関する天皇の命令である。曰く。国家は天皇の仁徳と臣民の忠孝によって成り立つ。ここに教育の根源がある。ついで、「父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ」云々と具体的徳目を掲げ、さらにこれらが古今東西に通用する普遍妥当性を強調して、その遵守を説くのである。その後 60 年近くにわたって、天皇への敬愛、忠孝一本、忠君愛国といった教育の理念が、絶対的なものとして国民教育を支配することになる。教育勅語は、国家主義、過度な愛国心、軍国主義の手本

となっていったのである。

参考のために、以下に教育勅語の全文を掲載しておく。

教育ニ関シ下シ給ヘル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ
徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克
ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
ハ此レ我カ国体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦実
ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ徳器
ヲ成就シ進テ公益ヲ広メ世務ヲ開キ常ニ国憲
ヲ重シ国法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉
シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ独リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
爾祖先ノ遺風ヲ顕彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ実ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬
ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ
拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ
明治二十三年十月三十日
御名御璽

以下は教育勅語の読みである。

ちん　おもうに、
朕　惟うに、
わが　こうそ　こうそう　くにを　はじむること こうえんに、
我が 皇祖 皇宗　國を 肇むること　宏遠に、
とくを　たつること　しんこうなり。
徳を　樹つること　深厚なり。
わが　しんみん　よく　ちゅうに　よく　こうに、
我が　臣民　克く　忠に　克く　孝に、
おくちょう　こころを　いつにして、　よよ　そのびを
億兆　心を　一にして、　世世　厥美を
なせるは、
濟せるは、
これ　わが　こくたいの　せいかにして、
此れ　我が　國體の　精華にして、
きょういくの　えんげん　また　じつに　ここに　そんす。
教育の　淵源　亦　實に　此に　存す。
なんじ　しんみん、
爾　臣民、
ふぼに　こうに、　けいていに　ゆうに、
父母に　孝に、　兄弟に　友に、
ふうふ　あいわし、　ほうゆう　あいしんじ、
夫婦　相和し　朋友　相信じ、
きょうけん　おのれを　じし、　はくあい　しゅうに　およぼし、
恭儉　己を　持し、　博愛　衆に　及ぼし、
がくを　おさめ　わざを　ならい、
學を　修め　業を　習ひ、
もって　ちのうを　けいはつし、とっきを　じょうじゅし、
以って　智能を　啓発し、　徳器を　成就し、
すすんで　こうえきを　ひろめ、　せいむを　ひらき、
進で　公益を　廣め、　世務を　開き、
つねに　こっけんを　おもんじ、　こくほうに　したがい、
常に　國憲を　重じ、　國法に　遵い、
いったん　かんきゅうあれば　ぎゆう　こうに　ほうじ、
一旦　緩急あれば　義勇　公に　奉じ、
もって　てんじょう　むきゅうの　こううんを
以って　天壤　無窮の　皇運を
ふよくすべし。
扶翼すべし。
かくのごときは　ひとり　ちんが　ちゅうりょうの
是の如きは　獨リ　朕が　忠良の
しんみんたるのみならず、
臣民たるのみならず、
またもって　なんじ　そせんの　いふうをけんしょうするに
又以って　爾　祖先の　遺風を　顯彰するに
たらん。
足らん。
この　みちは、　じつに　わが　こうそ　こうそうの
斯の　道は、　實に　我が　皇祖　皇宗の
いくんにして、
遺訓にして、
しそん　しんみんの　ともに　じゅんしゅすべき　ところ、
子孫　臣民の　倶に　遵守すべき　所、
これを　ここんに　つうじて　あやまらず、　これを
之を　古今に　通じて　謬らず、　之を
ちゅうがいに　ほどこして　もとらず、
中外に　施して　悖らず、
ちん　なんじ　しんみんと　ともに　けんけん　ふくようして、
朕　爾　臣民と　倶に　拳拳　服膺して、
みな　その　とくを　いつに　せんことを　こいねがう。
咸　其　徳を　一に　せんことを　庶幾う。

明治二十三年十月三十日
御名（ぎょめい）　御璽（ぎょじ）

以下は高嶋伸欣（琉球大学教授）による現代語訳である。
高嶋伸欣『教育勅語と学校教育』（岩波ブックレット No.174）1990 年を参照。

教育ニ関スル勅語
天皇（明治天皇）ご自身がお考えになるに、天照大神（あまてらすおおみかみ）以来の天

皇のご先祖たちが我が日本を建国するにさいし、その規模は広大で、いつまでもその基礎が揺るぐことのないようにされ、さらに、ご先祖たちは身をつつしみ、国民をたいせつにして、後の徳政のお手本を示された。天皇の臣民である日本国民は、いつの時代も忠孝をつくし、国民が心を一つにしてその美徳を発揮してきたこと、これこそ我が国体（天皇制社会）のもっともすぐれた点であり、教育の大もともここに根ざしていなければならない。

お前たち臣民（児童･生徒）は､父母に孝行し、兄弟は仲良く、夫婦も仲睦じく、友人とは信頼しあい、礼儀を守り、みずからは身をつつしみ、人びとには博愛の心で親切にし、学業に励み、仕事を身につけ、さらに知識をひろめ才能をみがき、人格を高め、すすんで公共の利益の増進を図り、社会のためになる仕事をし、いつも憲法を大切にし、法律を守り、ひとたび国家の一大事（戦争）になれば、勇気をふるいたて身も心もお国（天皇陛下）のために捧げることで、天にも地にも尽きるはずのない天皇陛下の御運勢が栄えるようにお助けしなければならない。こうすることは、単に天皇の忠良な臣民として行動するというだけのものではなく、同時に、お前たちの祖先が残したすぐれた点を継承し、それをほめたたえることにもなるのだから。

このような教えに従うことは、まさしく我が天皇の祖先たちが残されたおさとしで、皇室の子孫も臣民もともに守るべきものであり、之を過去現在のどの時代に当てはめても間違っていないし、国の内外、世界中に当てはめても誤りではない。自分（天皇）は、お前たち臣民たちとともに、このことを自分自身によくいい聞かせ、その教えを守り、君臣一体となってその徳をより高めたいと思う。

明治 23 年 10 月 30 日

御名（明治天皇、睦仁）御璽（天皇の印）

「ひとたび国家の一大事（戦争）になれば、勇気をふるいたて身も心もお国（天皇陛下）のために捧げることで、天にも地にも尽きるはずのない天皇陛下の御運勢が栄えるようにお助けしなければならない」は、あからさまな戦争のすすめである。これのどこが正しいのであろうか。他国への尊敬は完全に欠落している。

（3）軍人は戦争を止められない

戦争などすべきではないし、もし戦争が始まったならば、早急に戦火を消す努力をしなければならないことは、あたりまえである。それにもかかわらず、戦火はなぜ拡大するのであろうか。佐藤氏は、その理由として軍人の名誉心をあげる。軍人は負けたくないのであると、佐藤氏は言う。実に単純明快な説明である。日中戦争でもベトナム戦争でも、はじめは戦争の規模は小さいものであった。日本もアメリカも、簡単に相手をやっつけることができると、たかをくくっていた。しかし､中国もベトナムもけっして屈することなく、反撃してきた。ぜったい屈服しなかった。日本国は、戦争に莫大なお金を浪費し、ほとほと疲れていた。200 万人もの軍人を派遣しておくために、なんと国家予算の 80％もが軍事費に使われていたという。だから、止めればよかった。しかし、いつの時代も、現地の将軍はもっと兵士と武器を送ってくれれば、勝てるという。将軍は英雄であるから、政治家は拒むわけにはいかない。こうして軍人の名誉心のために、戦火はどんどん拡大する。

軍隊と軍事産業の癒着も、戦火の拡大に油を注ぐ。政府は兵器の注文は軍人にやらせるものであるから、軍隊の将軍と兵器会社の社長はなかよくなる。なにしろもうかる話であるからである。両者は一致結託して、政府からどんどん金を出させて、兵器工場を大きくさせる。平和主義者たちの反対があると、資本家たちはテレビや新聞の宣伝で、いかにも戦争は正しいのである､と国民をだます。アメリカだけではない。日本も、朝鮮戦争の時、外国の軍隊のためにどんどん兵器を作り、ぼろもうけをした。戦争のおかげでもうかるなんて、恥ずかしいことであ

る。

「死の商人」という言葉を聞いたことがあるであろう。他人の殺し合いでもうける人間のことである。三井、三菱、住友という大企業があるが、戦前は三大財閥と呼ばれていた。なぜ大金持ちになったかというと、武器を作ったり売ったりして大もうけをしたからである。死の商人に関しては、岡倉 古志郎『死の商人〔改訂版〕(岩波新書)』(岩波書店、1962年)は一読の価値がある。死の商人の天敵は、平和主義者である。しかし、金もうけの野望を遂げるために、ときには詭弁を弄し、自分たちこそは「平和の友」であるかのように装う。「ダイナマイト王」アルフレッド・ノーベルは、「ノーベル平和賞」を制定した。大富豪アンドルー・カーネギーは、「カーネギー平和財団」を創立し、軍備がいかに平和を脅かすかを説いた。しかし、これは死の商人の本音ではない。「平和は戦争準備によってのみ確保される」、「安全保障は武力のうらづけなしにはありえない」というのが、彼らの論理である。要するに、武器を買ってもらいたいだけなのである。金が欲しいために、「大量殺戮兵器の脅威によって戦争をなくす結果を生むのである」という詭弁さえ弄する。

これは過去の話ではない。今も、日本には兵器を作ってもうけている会社がある。たとえば、2008年の統計によると、世界で兵器をつくっている会社トップ35社の中に、日本の会社が3社も入っている。すなわち、三菱重工(25位)、川崎重工(51位)、三菱電機(59位)、NEC(74位)、東芝(85位)、富士通(87位)。日本企業のランキングが低いのは、武器輸出三原則等により他国への兵器輸出を行っていないためであった。しかし、2011年12月27日に武器輸出三原則は緩和され、日本企業も多国間の国際共同開発・共同生産に参画できる事になり、人道目的での「装備品」輸出も可能となった。装備品といえば聞こえはいいが、要するに武器のことである。

(4) 貧富の格差の放任

国と国の間の商売がうまくいかないことは、戦争の大きな原因である。富める国は自分の国だけが得をする商売をするのではなく、相手の国にももうけさせてあげなければならない。ところが、これが難しい。なぜかというと、貧しい国には、豊かな国がどうしても必要だから買いたいと思うような品物があまりないからである。また、貧しい国は農作物をたくさん輸出すればいいようなものだが、工業国に輸出するほど余分な農作物を作ることができない。今でも、アジア、アフリカ、南アメリカなどの貧しい国々と、アメリカや日本など豊かな国々とが、二つの世界に分かれている。この「南北問題」が、こんにち世界各地で起こっている紛争の温床である。

この貧富の格差の根底に潜んでいるのが、この地上にはすぐれた民族と劣った民族がいるという考えである。大昔からあった考え方である。指導する人間は責任が重いから、豊かな暮らしをするべきである。指導される人間は気楽なものだから、貧しくともいい、というわけである。そもそも、優秀な人間と劣った人間の違いは何であるのか。学校の競争で勝った人間ということに、これまでのところなっている。民族でいえば、戦争という競争で勝った民族が、優秀な民族だということになってしまった。昔からそうである。古代ギリシャ、古代ローマしかり。近代のイギリスやスペインもしかり。第二次大戦では、ドイツや日本もそういう主張をした。そんなわけがない。南京大虐殺を行い、「慰安婦」をつくった民族が優秀なのであろうか。ユダヤ人大虐殺を行った民族が優秀なのであろうか。後期講義においては、講義内容の理解を深めるために、あのミュージカル映画『レ・ミゼラブル』(2012年。英国制作)を小分けにして鑑賞した。身も心もどん底に落ち込んだジャン・バルジャンを救ったミリエル司教のような人物こそ、優秀な人なのである。司教の無私の愛に触れたジャン・バルジャンは、回心した。かつての自分と同じように身をやつし、死につつある若い女性ファンティーヌを助け、その娘コゼットを引き取って大切に養育した。自分を

つけ狙うジャベール警部をさえキリストの心で赦した。こういう人こそ優秀な人なのである。戦争に強いのが、優秀なのではない。弱い者をかばい、助けてあげるほうが優秀であろう。これが人間にとって一番重要なことである。優秀か劣っているかなんということではない。助けるということ、守ってあげるということである。学校についていえば、勉強のできる人はできない人を助けてあげればいいのである。みんなで勉強ができるようになればいいのである。勉強を一生懸命やるのは、貧しい人や貧しい国を助けるためである。助け合うということ、これが本当の意味で優秀であることだと思う。

「自分は楽をして、他人を働かせようとする気持ちが戦争のもとなのだ」

「貧富の差とは何か。具体的には、それは、知的な職業ほど豊かであり、肉体労働や単純労働につく者は貧しい、というかたちをとっている」

これらは佐藤氏の上掲書におけるまとめの言葉である。肝に銘じておきたい。

3.2.3　暴力の分析：人はどうして暴力をふるうのか

戦争や紛争には暴力が伴う。話し合いで決着がつかない場合、人間は暴力に訴える。ときには問答無用とばかり、いきなり暴力を振るうこともある。暴力などないほうが家庭でも国家でも国際社会でもいいのに、どうして人は暴力を振るうのであろうか。善き闘士は暴力と闘わなければならない。武器によってではなく平和な手段によってである。ところが、その平和な手段というのが難しい。日頃、平和な人であってもいざ自分や家族のいのちが危険にさらされるとき、いやがおうでも暴力を使用してしまう現実がある。暴力とはいったい何であるのか。どうしたら暴力はなくなるのか。「暴力の分析：人はどうして暴力をふるうのか」という講義題目は、この問題を考察する学習である。

暴力について考察するにあたり、二つの本がとても参考になった。一つは、リチャード・ランガム　デイル・ピーターソン 共著・山下篤子 訳『男の凶暴性はどこからたのか』（三田出版会、1998 年）である。原題は、R. Wrangham and D. Peterson, *Demonic Males Apes and the Origins of Human Violence*（Houghton Mifflin, 1996）である。リチャード・ランガムはハーバード大学人類学教授、霊長類研究の世界的権威である。デイル・ピーターソンは作家・フリーライターである。もう一つは、シャーロット・パーキンス・ギルマン著『フェミニジア――女だけのユートピア』（現代書館、1984 年）である。原題は、Charlotte Perkins Gilman, *Herland*（Pantheon Books, 1979）。1915 年に第 1 版が出版された。

さて、『男の凶暴性はどこからたのか』のカバーには以下の文言が書かれている。

> ヒトとチンパンジーに共通した悪しき習性。それは殺人である。チンパンジーは単になわばりを守るためではなく、序列を確立するためでもない、殺すことを最初から狙って同類を殺す。この驚愕的な事実からはじめて、著者たちは人間、ひいては男たちの戦争、無差別テロ、殺人、レイプ ..... など、あらゆる暴力の本質に迫っていく。男の凶暴性はいったいどこからきたのか。男がいる限り殺戮や争いは永遠になくならないのか。そして唯一残された希望の光とは。暴力の形態がますます複雑化し多様化する現代に、あらためてその根源を問う。

最近の研究によると、人間の暴力志向は人類誕生以前の過去にまでさかのぼることがわかっていると、著者のランガム博士は言う。実に 500 万年前から猿人は殺し合いをしていたようである。人間はそもそも類人猿であるということ、これが人間の暴力性の究極の原因らしい。さらに、オスの集団が隣接集団に侵入攻撃をしかけ、攻撃しやすい敵をみつけて殺すという動物は、1000 万種以上もある動物の中で、チンパンジーと人間だけであるという。オランウー

タンはチンパンジーと並んで人間に近い種族であるが、オランウータンのオスは日常的にレイプする。その目的は諸説があるが、「性的威圧説」が有力である。一度性的に威圧することによって、さきざきメスを性的に支配できるようになるというものである。オランウータンの場合、交尾の三分の一から二分の一以上がレイプである。チンパンジーの場合はこれよりはるかに少ないが、それでも人間と同じくらいの頻度で起こっていると考えられている。

なにか暗い話になったが、明るい話もある。ランガム博士は上掲書の第10章において「おだやかな類人猿」：ボノボ（Bonobo）を紹介している。ボノボはアフリカのコンゴ民主共和国の奥地に住む、体格も体力もチンパンジーとよく似た類人猿である。ボノボは平和なチンパンジーであり、力ずくの交尾も、おとなのメスに対する暴行も、子殺しもまったくみられない。両性は共優性である。一位のメスと一位のオスは同等であり、最劣位のメスと最劣位のオスも同等である。果物や肉を見つけた場合、チンパンジーなら例外なくオスが所有者になるが、ボノボの場合は両性とも所有者になることができる。おいしい食べ物を見つけたなら、ひとりじめをせず互いに分け合うことができる。メスたちは徒党を組む。そうすると一位のオスでもかなわない。オスが過剰に攻撃的になると、メスたちに押さえつけられる。これは暴力の抑制に関する一つのヒントになるであろう。メスたちを結びつけるものは何か。それは「ホカホカ」（Hoka-Hoka）と呼ばれる性行動である。メスたちを結びつけるものは血縁ではない。メスは青年期になると家族のもとを去り新しい集団に移籍する。そこでひとつの経験をする。ホカホカの経験である。どういうことかというと、若いメスが座って年長のメスをみつめる。年長のメスは、ホカホカする気があれば、あおむけに寝ころんで足を広げる。若いメスはすばやく近づき、二頭は抱擁しあう。そして顔を会わせてエクサティングなセックスをする。こうして新参のメスと集団のメスのメンバーたちの結びつきが深まっていく。オスもメスも、異性とも同性ともいそいそと性関係をもつ。かれらは性を友人を作る手段として使う。だれかが緊張しているとき、それをなだめるためにも使う。攻撃行動のあとの仲直りのためにも使う。そういうわけで、かれらにはチンパンジーにみられるような集団間の暴力がない。ボノボはなんとサルをペッとする。チンバンジーのオスはサルや子豚を狩り、殺す。ボノボも肉を好む。ムササビも食べるし、ミミズも食べる。だが驚くべきことに、サルを食べたという報告は一つもない。それどころか、サルをペッとして遊び、愛でるのである。

なぜボノボだけがかくも平和な類人猿なのであろうか。明確な答えは見つかっていないが、有力な仮説によると、ボノボの祖先はサルを狩り、たがいに狩あうチンパンジーに似た類人猿であった。その祖先から進化してボノボになると、オスはデーモンのような性質を失い、たがいに対する攻撃性も低下した。その過程で、おそらくサルを狩猟する欲求もなくなったと思われる。その進化がいつどのようにして起こったかはまだわかっていない。ボノボの場合は、ホカホカが集団内および集団間の平和を構築する有効な手段であることをわれわれは確認したが、もちろんこれをそのまま直接に人間に適用することはできない。しかしながら、とかくセックスを軽く考え、ときには悪用しがちである人間たちは、これをもっと尊重し、善く用いることに意を用いるべきであろう。そうすることによって家庭や社会におけるいざこざが相当解消されるのではないかと思われる。それからもうひとつ、ボノボを特徴づけるメスたちの徒党行動は、人間たちにとっても示唆するところが大きい。世界には今なお男尊女卑が日常的に行われている国が数多くある。男たちがいばりくさり、いいところ取りをし、女性たちは服従と搾取をよぎなくされている。先進国といわれる日本においても、国会議員の大多数は男性であり、女性は少数である。同じことは、会社役員や大学教員についても言える。女性がバラバラ

に男女平等を叫ぶだけでは、力が及ばないかもしれないが。しかし、女性たちがかたく手を握り合い、互いの結束を固めることによって、またそれを可能となるようなしくみ作りを社会がサポートすることによって、事態は改善していくのではないであろうか。

この女性の結束と男性の凶暴性の制御という重要な社会的契機に関して、シャーロット・ギルマン 著『フェミニジア―女だけのユートピア』は、まことに示唆に富む本である。ギルマン（1860-1935）は、米国においても女性の地位が低かった20世紀初頭、女性の地位向上のために闘ったフェミニストである。私の範疇では、善き闘士に数えることができる人物である。この本は女性だけの国についての空想的小説である。話は、女性が単独で子どもをつくる方法を発見したというところから始まる。国から男性がいなくなるということは、どういうことであろうか。恐いものがいなくなった。男に保護してもらう必要がない。男向けの演技を打つ必要がなくなった。女性であることにしばられたり、「女らしい」女になる必要もなくなった。社会は子を産み、育てることに最大の価値をおき、それを中心に構成されていた。ここの女性たちの特徴は、「母性」である。男性の好みの投影である「女らしさ」は、著しく欠乏している。「競争」というものがない。女性は自分の国を愛する愛国者ではあっても、帝国主義者ではない。そのためには女性が同盟を結ぶことが重要なのである。一読の価値があるおもしろい本である。

3.2.4　福島原発事故と日本の現状：「喉元過ぎれば熱さを忘れる」

日本において善き闘士が社会問題を直視するという場合、2011年3月11日の大悲劇をけっして見過ごすことはできない。「福島原発事故と日本の現状：「喉元過ぎれば熱さを忘れる」」という題目は、今なお解決されていない最重要課題に関する学習である。原発事故などという言い方は、きれいごとである。原発は爆発したのである。それによって大量の放射能を、日本中に、世界中にまき散らした。原発という言い方もあいまいである。正直に原子力発電所というべきである。発電は発電でも原子力による、すなわち原子核の分裂によって生じる力による発電である。その原子力による爆弾が言うまでもなく原子爆弾である。ヒロシマとナガサキへの原子爆弾の投下によって、痛い目を見たにもかかわらず、日本政府は安全でクリーンなエネルギーであるとうそをついて、原子力発電を増進してきた。このうそは福島原子発電所爆発によって暴露された。原子力の危険性はどんなに警戒しても警戒しすぎることはない。ナガサキに投下された原子爆弾はプルトニウムという放射性物質を用いた爆弾である。プルサーマル計画は、プルトニウムとウランを混ぜた核燃料（MOX）を現在の原子力発電所で用いるという、成功の見込みのない計画であり、国民の税金を食らう金食い虫である。

そもそもプルトニウムという物質がいかに恐ろしい物質であるかをどれくらい正確に把握しているのであろうか。聖書の『創世記』のなかに、最初の人間が神から「取って食べてはならない」といわれた禁断の果実の話が収められている。この話はたんなる昔話ではない。現代に生きる私たちに関係のあるものとして、読まれるべきである。私たちの話の流れからすると、この禁断の果実はプルトニウムに適用されてしかるべきである。プルトニウムはこの世で最も毒性の強い物質の一つである。体内に取り入れられるなら、プルトニウムが放射するα線によって恐ろしい内部被爆がおこる。地球ができた当初、大地はプルトニウムやその他の放射性物質でいっぱいであった。その後、気が遠くなるような年月の経過のなかで、プルトニウムは地球上から姿を隠した。神は人類が誕生し、生存する環境を整えたという言い方をすることもできるであろう。神は人類がプルトニウムを取って食べ、破滅することがないように、それを禁断の果実と定めたのである。人類は誕生以来何10万年にもわたり、プルトニウムの存在を知らず、

したがって、それに手を出すことをしなかった。

しかしながら、それなりの科学知識をたくわえた人間たちは、近年になって、プルトニウムの存在を探し当てた。そして、1941年、その一族のプルトニウム239が核分裂をきわめて起こしやすい物質であることを知った。当時の状況には、戦争がすでに暗い影を落としていた。良識のある科学者たちは、この核物質が大量殺人爆弾製造につながりうることを認識していたので、プルトニウムの存在を長い間秘密にしてきた。しかし、科学者とよばれる人たちの中には悪魔の誘惑に屈し、この禁断の果実に手を伸ばし、そこに潜む巨大なエネルギーを戦争へと解放しようとする者もいた。その時から文明のありようははなはだしく悪の方向に変化をとげ始めた。その結果が、ナガサキに投下されたプルトニウム原子爆弾による、空前の大量殺戮であった。プルトニウムが「地獄の王の元素」とよばれるゆえんである。プルトニウムという語は、「死者の国の王」を意味するプルートというラテン語に由来する。

その後、原子爆弾を使用した人たちは、何を考えてか、原子力の平和利用という美辞麗句のもと、原子力発電を開発した。この人たちの手にかかれば、「悪魔の元素」はたちまち「人類の夢をかなえる元素」に変化するかのようである。そこには、プルトニウムという禁断の果実を自由自在に制御し、支配できるという楽観がある。楽観などというのはまやかしである。はっきりいえば、最大の無知であり最大の傲慢である。それは必然的に悲惨な結果をもたらした。スリーマイル島、チェルノブイリ、フクシマの原子力発電所爆発が顕著な例である。そもそもプルトニウムは人類の手に負えるのか負えないのかを、抜本的に検討しなければならない。もし手に負えないのであれば、人間はいさぎよく手を引き、神の手にお返しすべきである。

福島の問題に戻ろう。この問題を考えるにあたり、小出 裕章氏の本がとても役に立った。小出氏は、自分の良心に従って原子力発電所反対の立場を貫いてきた科学研究者である。そのために勤務する大学では万年「助教」のままであったが、氏にとっては社会的地位よりも美しい環境の保全のほうが重要なのである。彼も善き闘士である。参考になった小出氏の本は以下のとおりである。

小出 裕章『日本のエネルギー、これからどうすればいいの』(平凡社、2012年)

小出 裕章『原発はいらない(幻冬舎ルネッサンス新書)』(幻冬舎ルネッサンス、2012年)

小出 裕章『この国は原発事故から何を学んだのか(幻冬舎ルネッサンス新書)』(幻冬舎ルネッサンス、2011年)

小出 裕章『隠される原子力・核の真実—原子力の専門家が原発に反対するわけ』(創史社、2010年)

小出氏の本ではないが、以下の本も参考になった。

石橋 克彦 編『原発を終わらせる(岩波新書)』(岩波書店、2011年)

広瀬 隆・明石 昇二郎『原発の闇を暴く(集英社新書)』(集英社、2011年)

佐藤 栄佐久『福島原発の真実(平凡社新書)』(株式会社平凡社、2011年)

丸山 重威『これでいいのか福島原発事故報道』(あけび書房、2011年)

齊藤 勝浩『知っておきたい放射能の基礎知識』(ソフトバンク・クリエイティブ株式会社、2011年)

菅谷 昭『原発事故と甲状腺がん(幻冬舎ルネッサンス新書)』(幻冬舎ルネッサンス、2013年)

特に小出氏の『日本のエネルギー、これからどうすればいいの』は、中学生にもわかるように書かれており、おすすめしたい。この本は全部で以下の8章からなる。

第1章　福島原発事故のあと、日本はどんな状態なんですか？

第2章　どうして日本にはこんなにたくさんの原発があるんですか？

第3章　いくらなんでも日本は核兵器をつく

らないですよね？
第４章　日本の原発はなくせないんですか？
第５章　原発をやめたとしたら、どうなりますか？
第６章　これからは自然エネルギーにシフトしていくべきですよね？
第７章　経済に元気がないと困るのではないですか？
第８章　どうすれば社会構造や世界のあり方を変えられるんですか？

いずれも単純ではあるがきわめて重要な質問であると思う。なにはともあれ、「第１章　福島原発事故のあと、日本はどんな状態なんですか？」は、日本に住むだれもが知っておかなければならない問題である。小出氏の報告では、3.11の事故により地面に降り積もったセシウムの量を計算すると、1m^{3}あたり３万ベクレルを超える汚染地域が広い地域に広がっている。法律を厳密に守るのであれば、おそらく、２万平方km（福島県の約1.5倍の面積）以上の土地を、人が住めない地帯にするしかない。ところが国は、猛烈な汚染地帯を除いて、「みんな住んでもいいよ」と、法律を変えてしまった。

そのような場所で今でも多くの人が生活している。被害があまりにも膨大で、国は賠償できないから、法律を変え、人々を被爆させることにした。多くは農業者や漁業者であり、その土地と結びついて生きてきた人たちだから、簡単に生活の場・仕事の場を離れるわけにはいかない。ほんとうは逃げなければならない。特に子どもは絶対逃げなければならない。このような現実について、国はきちんとした情報公開をしていない。1986年のチェルノブイリ原発事故により日本にも放射能がたくさん飛んできたが、そのときの放射能に比べて100倍も強い放射能が東京に到達した。国は情報統制によってこの事実を隠蔽した。さらに問題なのは、子どもたちの被爆をそのままにしていることだ。文部科学省は福島県内の子どもたちの被爆について、年間20ミリシーベルトまでは認められるという通達を出した。しかるに、年間５ミリシーベルトでも、大人が白血病の原因になったと認められる被爆レベルである。細胞分裂が盛んな子どもほど、放射能に格段に大きな影響を受けることは、周知の事実である。年間20ミリシーベルトというのは、125人にひとりがガンで死にますよという値、０歳の赤ちゃんであれば31人にひとりが将来ガンになって死ぬという値である。福島県だけで、30万人の子どもたちが危険にさらされている。

「除染」というが、うそである。除染とは汚れを除くという意味であるが、放射能は煮ても焼いてもなくならない。「除染」はできない。できることは、ある場所にある汚れを別の場所に移すことで、「移染」と呼ぶべきである。大地を汚しているセシウム137は、半分に減るまでに30年かかる。学校のグラウンドや公園など子どもたちが集まる場所は、徹底的に移染すべきである。けれども、山林や農地の汚れを別の場所に移すことは基本的にできない。事故による放射能は日本中に、さらに国境を越えてかるがると世界中に広がったから、濃度の高低を問わなければ、日本中の土が汚染された。世界中が汚染された。もちろん作物も汚染された。食べ物はすべて汚染されている。私たちは汚染の中で生きていく覚悟をしなければならない。それとともに、どうしてこんなことになってしまったのか、そのことをしっかり見て、これからのことを考えていく必要がある。

第２章～第８章の問題も重要なものばかりであるが、紙数の関係のため、各自がこれを読み自分で考えることに委ねることにしたい。もう一つ忘れてはならない問題は、使用済み核廃棄物をどこに捨てるべきであるかという問題である。ルポライターの鎌田 慧氏は『原発列島を行く（集英社新書）』（集英社、2001年）という本と、『ルポ　下北核半島』（岩波書店、2011年）という本の中で、この問題に取り組んでいる。鎌田氏はこれまで、社会的弱者の立場から、ルポルタージュを数多く発表してきた。全国各地の原子力発電所についての作品も多く、この

二冊もそれに属する。彼が原発を見学したときなど、案内人に、「廃棄物はどうするのですか」とたずねる。するとハンで押したように、「青森県の六ヶ所村にもっていきますので、心配はありません」との答えが返ってくる。六ヶ所村は、「放射性生ゴミ」捨て場としてしか考えられていない。福島県の北は宮城県、その北は岩手県、さらにその北が青森県。その青森県の下北半島のつけ根、太平洋岸に位置する、南北に33キロ、東西に14キロ、短冊のように細長い村、これが六ヶ所村である。かつては貧しいけれども、のどかで安全に暮らしていた六ヶ所村であるが、今は。核燃料サイクルの5点セットによる危険に日々おびやかされている。5点セットとは、年代順にいえば、「ウラン濃縮工場」、「低レベル放射性廃棄物埋没センター」、「再処理工場」、「高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター」、そしてプルサーマル計画をささえるための「MOX（プルトニウムとウランの混合酸化物）燃料工場」である。「放射性生ゴミ」捨て場は、こんなにも増殖した。

どうしてこんなことになったのか。人間の欲望のゆえである。日本の豊かさを維持、推進すべく国策として原発を猛進させてきた政府、それに結託した財界、そしてそれに同調した国民。六ヶ所村の危険は、国民全体の罪である。国民の欲望の象徴ともいうべきダミー不動産会社は、貧しさに苦しむ六ヶ所村の鼻先に、大金というニンジンをつきつけた。いわく。「昔のように娘は売れない。だからいまは娘の代わりに土地を売るのだ」と。大多数の農業者は大金に目がくらみ、先祖の血と汗の結晶である土地を売り渡した。かくして、水田やジャガイモ畑は「放射性生ゴミ」捨て場と化した。他方、少数ながら「NO」の声を上げた農業者もいた。鎌田氏は、その一人である小泉金吾さんを紹介する。小泉さんは部落で一戸だけ残って、農業を続けた。そのため、再処理工場にむかう道路は曲がってしまった。「おらは絶対だまされねえ」。それが40年闘い続けた、小泉さんの誇りである。近隣地域には、ほかにも、核燃基地に反対する人びとはまだ多くいる。私も幾度か六ヶ所村を訪れたことがあるが、小泉さんの心意気に共鳴する一人である。東京から遠く離れた青森県であるから「放射性生ゴミ」捨て場にしてもいいのであろうか。地方をばかにする心のあり方が、国民レベルでの問題解決のための話し合いを疎外している。

「大金というニンジン」は地域社会を潤すように見えるが、実はそれを破壊するものであることも知っておかなければならない。静まりかえった会場に荘厳なチェロの音色が響き渡った、といっても、本学のチャペルではなく、青森県下北半島である。朝日新聞青森総局の編集による『核燃マネー』（岩波書店、2005年）という本に収録されている話である。2003年11月、会場は、六ヶ所村の文化交流プラザ「スワニー」の大ホール。「音響の良さは国内でも上位」という。客席を埋めた約700人の聴衆はラトビア出身のミッシャ・マイスキーの演奏に酔いしれた。「まさか六ヶ所村で聴けるとは思いもよらなかった」。そう世界的なチェリストの演奏をナマで味わえた感動をアンケートに記す人もいた。客を喜ばせたのはそれだけではない。入場料は5千円。盛岡や札幌会場の半額以下である。しかし、私は素直に喜ぶことではないと思う。入場料が「超格安」なのは、約1千万円の公演費用の7割ほどを村が補助したからである。人口1万1千人と過疎化が進んでいるにもかかわらず、六ヶ所村は「文化振興」イベントになんと年4千万円もの予算を計上している。それというのも、核燃（核燃料）施設があってのことである。同村には核燃サイクル施設が進出した1988年以降、200億円を超える電源三法交付金が入ってきた。加えて年50億円の固定資産税もある。これら核燃マネーは、財政赤字に苦しむ地方自治体にとっては渡りに船であるが、問題がある。電源三法交付金は核燃施設が役目を果たせば、いずれなくなるカネである。このカネの財源は、われわれ電気消費者が電力料金に上乗せして支払わされているものによる。私は核燃マネーによって得たものよ

り、失ったもののほうがはるかに大きいと思う。1968 年から 1972 年にかけて、私は何度も六ヶ所村方面を訪れた。そこは先祖が血と汗をもって開墾した土地であり、人びとが畑ではたらき、小径を人びとが行き交い、乳牛が草をはむ緑の牧草地帯であって、子どもたちが駆けまわっていた。まことに優しい風景であった。しかし核燃マネーによって買収された結果、草むらのなかに、人家の礎石が残され、テレビや洗濯機が投げ捨てられ、朽ち果てたバス停の標識がポツンと立ったりしていた。今はそれもない。六ヶ所村の 7 つの集落が壊滅させられた。土地と漁業権を失った人びとは、核燃施設で働くことをよぎなくされている。農民・漁民の自己責任うんぬんするのは見当違いである。悪いのは、国と結託した電力事業者である。彼らはおかかえの不動産業者を使って、実に狡猾かつあくどい方法で農民・漁民から先祖伝来の自然をだましとった。自らの利益のためには弱いものを食い物にする、原発推進議員や御用学者たちも悪い。「海も森も青いのが青森県だ。陸や海からの食べ物が採れなくなったら、日本も終わりだべ」。40 年も原発反対運動を続けてきた種市信雄さん（82 歳）の言葉である。

日本には他のところにも種市さんのような人たちがいる。山口県上関町祝島（いわいしま）、そこには中国電力によって対岸の地区に進められている原子力発電所建設計画に根気よく反対しつづける人たちがいる。人数では原発推進派島民の方が優勢である。彼ら曰く。電源三法交付金や固定資産税等により安定的な収入がえられる。原発関係者の定住により人口の減少に一定の歯止めがかかり、産業が活性化される。一方の反対派島民は、祝島は原発予定地のほぼ真正面（直線距離で約 3.5km）に位置しており、農水産物の放射能汚染への懸念など生活環境に与える悪影響が甚大であると主張している。島民以外では、環境保護団体らが周辺海域に小型クジラや海鳥カンムリウミスズメなど複数の貴重な生物が生息することや、付近に活断層が存在する可能性があることを指摘している。私は、たとえ人数では少なくても、人間の営みが自然の循環の一部であると見なす原発反対派島民の姿勢に共感を覚える。纐纈（はなぶさ）あや監督の「祝の島（ほうりのしま）1000 年先にいのちはつづく」という DVD を見て、強くそう思った。ケースには次のような説明文が載っている。

> 瀬戸内海に浮かぶこの島は、台風が直撃することも多く、岩だらけの土地には確保できる真水も限られ、人が暮らしやすい環境とは決していえない。その中で人々は、海からもたらされる豊穣な恵みに支えられ、岩山を開墾し、暮らしを営んできた。そして互いに助け合い、分かちあう共同体としての結びつきが育まれた。「海は私たちのいのち」と島の人は言う。1982 年、島の対岸 4km に原子力発電所の建設計画が持ち上がった。「海と山さえあれば生きていける。だからわしらの代で海は売れん」という祝島の人々は、以来 28 年間（2010 年の時点）反対を続けている。1000 年先の未来が今の暮らしの続きにあると思うとき、私たちは何を選ぶのか。いのちをつなぐ暮らし。祝島にはそのヒントがたくさん詰まっている。

効率と利益を追求する社会が生み出した原発に対して今まで 29 年にわたり闘い続け、未来のために豊かな海を守ろうとする人々の中に、「ひとりが攻められれば、ふたりでこれに対する。三つよりの糸は切れにくい」という聖書の言葉（『コヘレトの言葉』4 章 12 節）の具現を見るような気がする。彼らの運動のために祈るとともに、自分なりに具体的な支援を続けたいと私は思う。

3.2.5 「エネルギー浪費型社会：日本のエネルギー浪費の目に余る現状」

原子力発電所の問題は、政府や電力会社だけの問題ではない。国民一人一人、国民全体の問題として認識しなければならない。わたしに

関係のない問題であるとしらを切るわけにはいない。わたしも電気を利用し、電気の恩恵にあずかり、日々、電気に依存した生活をしているからである。「エネルギー浪費型社会：日本のエネルギー浪費の目に余る現状」という講義題目は、過度の電気依存の問題に関する学習である。世界には電気の恩恵にまったくあずかることができない地域がいまだ数多くある反面、日本を含む先進国においては、電気が豊かに供給され、人びとは電気を浪費している。彼らは気がついていないかもしれないが、電気を支配しているのではなく電気に支配されているのである。電気が人間の支配者にのし上がり、人間は電気に隷属しているのである。そもそも電気という漢字は、「雷の素（原料）」という意味である。雷は電気作用であるから、うまい表現ではある。もともと、電気は electricity 等の西欧語の翻訳語であり、琥珀を意味するギリシア語の ēlectron に由来する。琥珀を摩擦すると静電気が発生することを発見した故事によるもので、そこから electricity という言葉が生まれた。19 世紀の後半、人間の知恵は電気の実用化に到達した。エジソンによる電球の発明やベルによる電話の発明は、その画期的な事例である。その後、電車、自動車、テレビジョン、電気炊飯器、電気冷蔵庫、電気掃除機、パーソナル・コンピュータ、スマートフォン等、電気に頼る便利品が作られ、日常生活の中に浸透している。たしかに電気関連物は便利ではあるが、電気に頼るものである以上、電気の供給が止まると、たちまち機能しなくなる。人間は電車やエレベータの中に閉じ込められ、家では真っ暗な夜や、エアコンディショナー無しの暑苦しい生活をよぎなくされる。スーパーマーケットは閉まり、コンビニエンス・ストアはインコビニエンス・ストアとなる。もっと深刻なのは、原子力発電所である。電気の供給が止まり、自家発電能力さえ奪われたとき、有毒な放射性物質を大量に放出し、広範な地域にわたり、人間、家畜、自然に深刻な被害をもたらした。

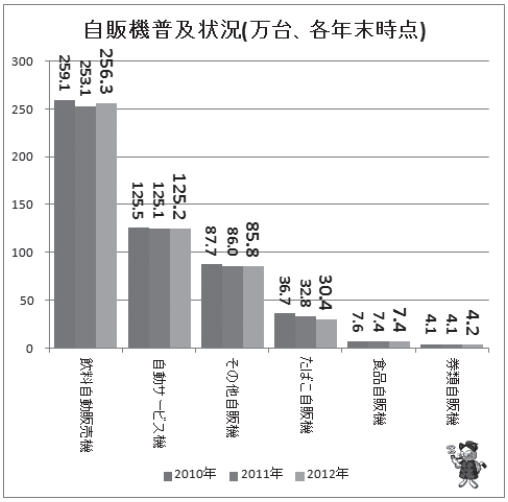
現代人は電気に依存しすぎている。本学においても、学生たちの中にはせっかく心を落ち着かせることができるチャペルにいながら、片時もスマートフォンを離すことができず、ピピピとやっている人たちもいる。人間が電気に頼る快適な生活に慣れていくにつれて、しだいに電気がのし上がり、ついには人間の支配者になってしまった。2011.3.11 の大地震により電気が止まると、電車が止まり、携帯電話もつながらず、人間は右往左往した。もっと深刻なことは、日本列島全体が、原発事故のため水素爆発による壊滅の危機にさらされたということである。そうなると、もう人間は電気の奴隷であり、電気は人間の独裁者としか言いようがない。そもそも電気がなければ、文化や文明は成り立たないのであろうか。人知の栄華を極めた古代ギリシャ文明。そのパルテノン神殿は、言うまでもなく電気なしに建造された。ソクラテスは電車に乗らず、テレビジョンやスマートフォンをもたなかった。それでも、人類最高の知者となった。彼は話したい人があれば、その人の所へみずから歩いて行き、対面の会話を楽しむことができた。電車が利用できない場合、歩くということはあたりまえのことであるが、現代人は危機に直面してやっとその単純な真理を思い出す。むしろ、日常から、歩くことや対面の会話こそがあたりまえであり、電気への依存は最低限に抑えるというライフ・スタイルが必要ではないだろうか。私たちは、電気に支配される人間ではなく、電気を支配する人間であるべきである。

以上のような問題意識をもって日本社会における電力使用を見るとき、ゆゆしき現状がある。この問題に関しては、環境評論家の宮嶋 信夫著『増補版　大量消費社会ー大量生産・大量販売・大量廃棄の仕組み』（技術と人間 / 高橋昇、1994 年）が参考になった。この本の序章は「大量生産・大量浪費社会」の問題を扱っている。1990 年から、宮嶋氏は「大量生産・大量販売・大量廃棄」の仕組みの問題性を指摘している。1990 年の時点で、自動車、テレビジョン、時計の大量生産のため需要が飽和状態に達

している。製品を国内で吸収するには、自動車、テレビジョンは全世帯が2年前後で1台ずつ買い続けなければならない。時計は一人が年3個余りを買い続けなければならない。そのなかでなお生産をふやすために、消費財では使い捨てシステムが導入された。それまでステイタス・シンボルであったカメラは、使い捨て商品が現れた。ビールは、リサイクルのびん詰めから使い捨てのアルミ缶にかえられた。おかげでアルミメーカーは大幅に生産を伸ばした。石油化学メーカーは、プラスチックの使い捨て包装品や容器を開発して、増産に成功した。このような肥大化した生産力を柱とした経済メカニズムで成り立つ日本社会は、大量の電力、石油などのエネルギーを消費し、資源を使い捨て、大量の産業廃棄物やごみを排出し続けている。これが社会問題の根源であり、ここから原子力発電所建設問題、二酸化炭素排出による地球温暖化問題が生じた。以上のように宮島氏は指摘する。「肥大化しすぎた現代資本主義の拡大再生産への衝動」、つまり必要以上にもっとほしがる欲望、これが諸悪の根源である。今日、事態はどれだけ改善されたであろうか。

この本の第3章は「電力の大量消費者は誰か」という問題を扱っている。宮嶋氏によると、1990年の時点で、脱原発をめざす署名運動が数多くの人々の手で進められていた。そのさい、ごく普通の人から返ってくる問いが、「原発をとめて代わりはどうするの。今は余っていても、将来の電力需要はどうやって賄うの」であった。この問いに答える上で求められるのは、日本の電力需要構造に対する批判的視点である、と宮嶋氏は指摘する。当時、原子力に反対であるなら電気器具を使うなといった首相がいたが、全国民がすべての家庭用電力をとめたとしても、日本の電力需要の23％でしかない。その反面、産業用需要は日本の電力需要の60％を占める。その割合は今も基本的に変わらない。2010年の時点で、産業部門は43.9％、それと密接に関わる運輸部門は22.9% であった。

この本の第4章は「アルミ缶にみる浪費の仕組み」の問題を扱っている。宮嶋氏によると、アルミ製錬は1トン当たり1万5000kwh以上の電気を必要とする。電力のかたまりみたいなものが、アルミである。以下の図表は2012年末時点の自動販売機台数である。飲料水、各種サービス、たばこその他もろもろを合わせ、全部で約509万2730台である。



種類別では飲料自販機がもっとも多く約半数の256万台、次いでコインロッカーや両替機、ビデオソフトやパチンコ玉貸し機などの自動サービス機が125万台。切手や乾電池、新聞などの「その他自販機」の86万台が続く。飲料自販機内では清涼飲料がもっとも多く218万台、残りが牛乳やコーヒー（カップ式）、お酒やビールなどが続く。1988年頃から急増した自動販売機数は、製造企業の販売戦略による。国民生活上不可欠だからではない。自動販売機の1ヶ月の電気代は、1台で家庭一軒分の電力を必要とする。大体6,000～12,000円はかかる。2009年の試算で、自動販売機521万台の年間消費電力は、74億kwh。ちょうど原発1基分の電力に相当する。3.11以後、一時、日本の原発はすべて運転を休止した。それにもかかわらず、企業とそれに癒着した政治家たちが原発の運転再開を急ぎ、2016年12月現在3基の原子力発電所が再稼働しており、その数を増やそうと急いでいる。急いでいる理由は、はっきりし

ている。自らの利益のためである。環境ジャーナリスト・科学ライターの小澤 祥司氏は『エネルギーを選びなおす（岩波新書）』（岩波書店、2013年）において、人類の文明は地球の資源を狩猟し、消費することによって進んできた。それは今も変わらないどころか、来るところまで来てしまっている。現代の社会は「石油と電気漬けの社会」であると指摘している。石油と電気に依存しないライフスタイルの追求は、人類全体の最大の課題である。

おわりに

キリストが芳しい香りを放つ存在であるなら、キリスト者もキリストほどではなくても、わずかばかりの芳香を放つことができてしかるべきであろう。ところが、なかなかそうはいかない。その芳香はキリスト者の外面ではなく内面から出てくるものだからである。それはキリスト者の内に宿るキリストから出る芳香である。そのキリストとは最高善のことである。ただし、多くの人の場合、あまりにもそのキリストが小さすぎるために、外部の人に感じてもらうのに充分なほどの芳香を放つに至っていない。もちろん私もその一人である。私の内なる乳児キリストは幼児へと成長していかなければならない。内なる、あるかないかわからないほど小さな善はどのようにしてより大きなものに成長していくことができるのであろうか。善き者の萌芽はどのようにして善き者の実を結ぶことができるようになるのであろうか。即効薬はない。やはり善き闘士として社会の現実に勇気をもって向き合い、最高善の高嶺を目指しつつ、たゆむことなく善の道を歩み続けるしかない。ケンブリッジ・プラトニストの宗教哲学者ジョン・スミスが語った以下の言葉は、この道行きを的確に言い表している。

> その内において宗教が力強く統治するあのキリスト者にあっては、なんであれこの世のものどもを彼の究極目標として追求するほど、彼の諸大志は低劣ではありません。彼の魂は、地上的な諸計画や諸関心にはあまりにも釣り合いません。彼は自分自身が神から由来していることを理解していますので、絶えず再び神のもとへ帰ろうとしています。（『真の宗教の卓越性・高貴性』）